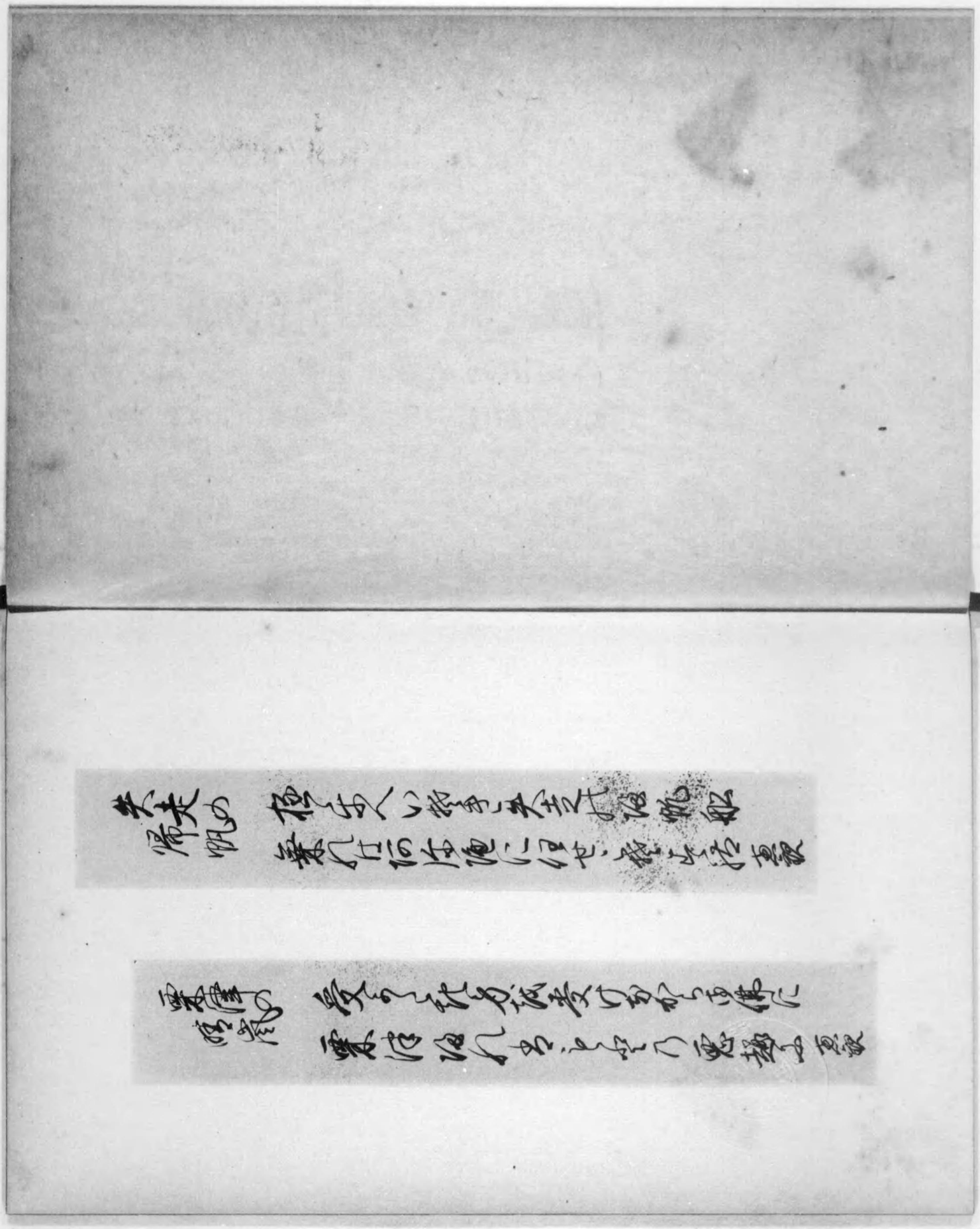
325
246

325
246

325-246

惠觀尊師遺訓



はしがき

惠觀尊師は、姓は守本氏京都に生る、深く佛教の蘊奥を極め各地に信行社を設け日夜慈教せらる、其化益を受るもの幾千人、皆轉迷開悟の實をあらはす、其高恩を感喜せざる者なし。大正五年二月迎山草庵に遷化せらる。茲に法語、和歌の遺訓を集め、師の深高なる平素の教化を追憶し、求法の伴侶、法義相續の助緣に供せんとす。

門人誌

信行社常典

一天地國王の御恩を常に尊敬すべき事。
一人は五常を本として、五倫の道を正ふすべき事。
一仁道を專らとして、堅く代りを取間敷事。
一吾職分を大切に勉め、他に心を懸間敷事。
一人の非を見聞せず、吾非を顧るべき事。
一安語兩舌等の惡言をいふ間敷事。
一萬事に就て堪忍を守べき事。
右七ケ條堅相守、常に心得べき事肝要也。

惠觀

惠觀尊師遺訓

明治二十七年三月下旬、但馬國より歸京の際、藁靴を履きて丹波路遠坂の峠より跡を見返へりて

遠坂の峰よりあとを詠むれば、御法の里を見つゝ戀しき

同峠前後には降雪澤山ある處へ、亦空より降り來るを見て

雪深く降るにつけても思ふかな、祖師御苦勞の昔思へば

ある時、種々障害を受けし事ありて

憂き事の重なる度に猶ほもまた、穢土の苦惱は思ひやらるゝ

憂き事を身に受てこそ世を厭へ、さなくばなどか世を厭ふべき

仕憂きは世を厭ふべき便りなり、障りは德の基ゐとぞなる

◎九月十日、川那部市次郎氏僅か一週間餘の病氣にて死去と相成る、

追弔會の際、短冊を送りて

身を棄てゝ人をば救ふ慈悲心は、是ぞ誠の佛なりけり

◎十二月、東京より歸京の際

法を思ふ心は誰れも一つにて、隔つ此身はいかゞなりとも

來歸する假の此身はとにもあれ、心は不滅十方法界

逢ひ見れば左こそ分れのつらからん、逢ず別れずいつも逢かな

◎二十八年一月、地震の折

ゆさ〳〵と內外ともに動けども、動かぬ者は眞の同行

◎同平生出席なき方に

取のきの信にはあらで平生に、喜びあひをせねば益なし

後悔を今にあらはす不信者の、身に心節のなきぞかなしき

いかにせんこの信德がわからずば、いよ〳〵後世は無明世界ぞ

宅に居て動かぬ人も今日よりは、どうぞ御席へ出てもらひ度し

◎六月東京滯在の際

世界中滿つる寶を得るよりも、自己の本心得るがまされり

萬億の寶を得るの人あれど、我が本心を得る人ぞなき

神儒佛敎の道も多けれど、自心求むる外はあらじな

神の道佛の道も儒の道も、自己の本心知る方便としれ

眞實のくちぬ寶は身のたから、己が心の主しをいふなり

我ぬしは卽ち世界の主しにして、世界卽ち我身なりけり

法界を我が一心と悟りなば、十方淨土この外になし

◎同横濱滯在の際

凡夫とはおよそな人の異名なり、自心忘れた人びとのこと

金持ちと高貴の人を助けたや、位寶が皆あだとなる
物知りの尻には兎角糞がつく、萬能よりも一心を知れ
稀に來てまれに遇ひたる稀な信、まれに喜ぶ人は稀なり
此度は稀な信者をまれに得て、稀な淨土へ稀に生るゝ

◎ある時口ずさみて

假の世へ假りの身を受け假に居て、かり業をして長短とは
假の世へ假の此身を借りてきて、眞の勤め知らぬ世の人
假りに來て本家へ歸る身となれば、喜び給ふ神も佛も

◎六月東京より歸宅の際

法を思ふ心は誰れもひとつにて、隔つ此身にかわりあるとも
往來する假の此身は隔つれど、心は同じひとつはちす葉
逢へばまた別るゝものと知りながら、されど逢ひたき法の友人

時くれば又も逢ふせの折もあり、逢へば語らむ法のむつごと

◎或時京都にて

法を思ふ人こそ實に賢けれ、高下貧富はとにも角にも
過去生にいかなる種のありてかは、かゝる貴き法に逢ふとは

◎二十八年七月二十五日、但馬國へ相續會の爲め出張す。炎暑の折
柄、生野銀山より步行し、峠を二つ越えけるに、非常に汗を流したれ
ば

暑き日に越ゆる山坂つらけれど、我等思へる慈悲のあつさは

◎或時但馬の國にて

谷間より法の香りをしたひ來て、法法華經の席の賑はひ
谷々の鶯さへも法を說くに、なぜ人として法を聞かぬぞ

◎十一月、東京暇乞の際

身を粉にし骨をくだきて友を呼ぶ誓ひの船のあらん限りは
假の身はこゝかしこぞと隔つとも心隔てぬひとつ蓮葉

◎二十九年一月元旦

新玉の年をとるとて祝へども年に命を取られこそすれ
來るべき年とてなけれ極樂の不生不滅の國ぞ目出たき

◎正月といふ題にて

一心に止まる人ぞ目出度けれ眞如佛性の月のさやけき

◎正月三日不圖思ひて

我が目は佛聖教を見る爲なれば此世の色は假りに見ること
我が耳は法り聞く爲の耳なれば此世の音聲假りに聞くこと
我が鼻は法香嗅ぐの爲なれば此世の香り假りにかぐこと
我が口は六字稱ふる爲なれば此世の言葉假りにいふこと

我が體は佛法修する爲なれば此世の業は假りになすこと
我が心佛を信ずる爲なれば此世は假りに心もつ事

◎正月十七日橋本いと女七回忌の折手向けに

七としの月日も一夢となりにけり あはれ墓なき殘る人々
有難や誓いの糸に導かれ友に歡ぶ今日の追善

◎二月大川氏へ送る

寢ては夢覺めては猶ほも忘られじ眞信ずる人ぞ思へる
眞をば信ずる人ぞなつかしき寢ても覺めても忘るひまなし

◎三月但馬國にて

深山なる草の庵に住むとても念佛信者のそばにありたし

◎八月丹波社より歸途稻葉に蜘蛛の巣を掛け住み居るを見て

稻の葉に結ぶ住家のさゝがには一夜の宿もあやふかりけり

◎今村氏より拙者の出濱を待つと云ふに對し

寢ては夢覺めては猶ほも思はれて、君に逢ふせの春を待つかな

◎三十年正月元旦

元日やまた喜びの始めかな

◎四月東京滯在の際、十日餘り臥床致し、此頃櫻花の滿開に付いて不圖浮みて

花とともに散ると思ひし露の身も、しばし浮世に殘る墓なさ

先立つも殘るもともに櫻花同じ嵐を受る身なれば

◎ある時、聞信者の少きを思ひて

法の道きゝえぬ人ぞかなしけれ、又と再び遇ふ折もなし

億劫に得がたき信をえながらも、聞信せざる人ぞかなしき

地獄餓鬼畜生修羅も外ならず、迷へる人の胸にこそあり

信を得て其まゝ打ち捨て置く人は、こがねを瓦礫とする如くなり

信心を得ながら相續せぬ人は、再び沈むもとの惡趣に

信を得し人の中にも信樂を、執持する人世には稀なり

◎六月二十三日、椎木氏の亡母安室貞穩禪尼二十五回忌に付、法名を取りて

二十五有のかれて今は極樂の、安室に住む心貞穩

◎七月十二日、柴田松之助氏釋信證一周忌追善の席、法名にて手向ける

眞實の信に逢ふたる印には、名にあらはして證を得しかな

◎或時京都にて

妙法の其一聲に遇はざれば、長き夢路の覺むる夜もなし

一聲に妙なる法の功を得て、不生不滅の德を悟れり

名號の利劍をとぎて煩惱の敵を自在にするが大將

◎佛法の信者は現生に十種の利益を得る

第一　神佛の加護を受く。
第二　人に信用を得る。
第三　智識を增す。
第四　主親の意に叶ふ。
第五　一家和合す。
第六　自業を大切に務む。
第七　自身を大切に守る。
第八　無益に寶を費やさず。
第九　四恩を知る。
第十　佛果に至る。

右十種の外利益數多し。

三十年七月

◎信有つて行の缺けたる人は、現生に十種の大損失あり

第一　佛神の護りを失ふ。
第二　自身の光明を知らず。
第三　一家和合に至らず。
第四　足る事を知らず。
第五　無常を忘る。
第六　意を養ふ事を知らず。
第七　四恩の德を失ふ。
第八　往生の大益を失ふ。
第九　臨終の正念を失ふ。

第十　元の惡趣に歸る。

三十年七月

◎福田千代子へ、同氏の名をとりて送る

極樂の福田を得し功德こそ、千代はおろかや無量壽を得ん
喜びの深き信者を稀にえて、共に報謝の導きやせん
宿善の厚き信者を得るならば、彌陀も嬉しくおぼし召すらん

◎三十年十二月、横濱に於て、念佛行者の心得七ケ條の要文を著す

念佛行者心得の事

一朝夕佛前に向ひ、香華燈明をさゝげ恭禮し念々讀經怠らざる事。
一衣食住に缺ざるを悅ぶべき事。
一總て冥加を思ひ、物を麁末にせざる事。
一家內一統睦間敷禮儀と世間を缺ざる事。

一身口意の愼み肝要の事。
一布施と堪忍を行ふべき事。
一行住座臥に稱名絕えせざる事。

右を、今日の作業に就て、佛德を應用するを以て專修の人とは申べき也

◎三十一年、安田喜七翁喜の祝に付て

何日までとかぎりを知れぬ壽を、身に成就して名にもあらはす

◎椎木氏發病致されし際送る

先立つも殘るもともに櫻花同じ嵐をうくる身なれば
西東かりの姿はへだつとも、心は同じ一とつはちす葉

◎森本九右衞門翁六十六歲と並に新築を賀して

六道の住家離れて今ははや、六字の家を宿と定めむ

◎柴田藤兵衞氏には多數の會員を誘導されしを賀して

有がたき月の光りを宿として、心の儘に世を照すかな

◎亦椎木氏へ送る

死出の路早き遲きのかはりあれど、行には漏れぬ我命かな

兼てより死の緣無量の理りを、常に知るこそ眞の同行

◎横濱滯在中口ずさみて

寢ては夢覺てはなほも思はれて、彌陀本願の深きお慈悲を

阿彌陀佛信ずる心深ければ、此世の罪もうすくなるべし

はる〳〵とへだてし道もいとふまじ、念佛信ずる人の爲には

信仰の深き心はおのづから、言葉の色に顯れぞする

◎一度、信を得たる人、私に懈怠すれば凡そ損害七つあり

第一　眞理の法味をなめず。

第二　身口意の神通妙用を知らず。

第三　因果を信せず。

第四　他の信迄妨害するになる。

第五　家内睦まじからずして禍を招く。

第六　佛の護念を受くる身が反て御罰を蒙る。

第七　報土に生せずして一端は化土に生れ終に墮獄す。

六月十五日

◎盛谷觀良翁、行年八十歳にて七月六日に逝去さる。京都に於て十二日、追弔會を勤催す。此際手向し句

菩提樹も今は枯木となりたれど、種は殘りて末さかえ行

八十路なる老の旅とはいひながら、法の命ぞ惜むなりけり

惜みてもかひなきものは命なれど、法の爲には止どめ置きたし

◎椎木氏一七日追善の際、手向に觀譽の二字を取りて

觀譽の惜む命をすつるのも、有爲の無常をしめす方便
其身こそ法の爲には觀譽なれど、また身を捨て人を導く

◎朝顏の花を見て詠ず

うるはしき花の姿はほむれども、咲せる主を譽る人なし
朝顏の主を尋ねて逢ふたれば、我身を作用す主じなりけり

◎三十一年十二月二十九日、辻氏の三回忌に相當すれど、月末なれば前に取越し勤催す。其際歌手向けて

三とせふる今日なき人を思ひてや、法の供養を共に手向けん
何事も夢の浮世の夢覺めば、よしあしともに皆迷ひなり

◎同妻女の操を譽め、亦、歌子といふ名を取りて歌によみ詩に作られし操かな、なき跡守る妻の道かな

◎三十二年一月三十日、濱松、横濱の社員諸氏と舞坂へ行くに、濱邊に

て風烈しく、松と浪との音を取りて

颯々の松の響きも其まゝに、我が御佛の聲にぞ有りける
颯々の音も涼しき本願の、法の御聲や彌陀の說法
浪の音松の響きとかはれども、何れか法の外にやはある

◎ある時ふと思ひて

何事も賴みにならぬ憂き世にて、彌陀を賴みにするはめで度し
木々の花林の鳥の聲々も、法の敎の外やなからむ
口に說き筆にあらはす御法より、四季草木の法ぞ勝れる

◎堀田きく子の名を取りて短冊を送る

きゝがたき御法をきくも御佛の、慈悲に惠まる身こそ尊き

◎芳村觀空氏三十五日の追善に手向けて

身を棄て法を勸むる心根を、あはれと思へ後の世の人

なき人をよそのあはれと思ふかな、今にも消ゆる露の身なるらん

先立し人を外にや思ふらむ、我身もやがて死出の旅立ち

惜まれて死する命ははれなれど、御法の爲にをしむ君かな

◎無常用意の序文に添へる二首

臨終を平常にさへ覺悟せば、まさかの時は心やすかれ

何事もまさかといふも常にあり、覺悟をしたる人ぞめでたし

◎西村惠行氏の四十二の初老を賀して

四十二重荷おろした氣の安さ、世も無事に經て壽永かれ

◎ある時口ずさみて

上もなき御法喜ぶ其人を、神や佛も常に護らむ

◎三十三年四月、歸命五十年祝賀の際

極樂へ生れてこゝに五十年の、つきぬ壽をともに樂む

◎三十三年十月、東京信行倶樂部遷成式に

おくれにし世にも尊き法ともに、よろこぶ精舍茲に建立

◎ある時口ずさみて

わからずば尋ね問ふべし一大事、聞かず怠る人ぞかなしき

是非ともに聞かねばならぬ法の道、聞く身になれば聞かざるはなし

聞けば知る聞かずば知れぬ一大事、聞きて信ずる人ぞめでたき

三惡道なしといふ人哀れなり、胸の三毒いかゞするらむ

◎柴田松之助氏七回忌供養の席に

七とせの昔を思ひ見るならば、いかに儚なき一夢なりけり

◎三十五年三月、柴田けい子の一周忌に手向けて

去年のけふ惜しき盛りの花と散る、殘りし花ものち賴まゝじ

大事ほど常に用意のなかりせば、まさかの時はさぞや後悔

跡や先きおくれ先だつ世の中は、今に逢れぬ無常迅速

⊡三十六年三月二十五日の朝口ずさみて

妄念が起ればおこれ捨てゝおき、たゞ念佛を強く唱へよ

妄念は凡夫の地體といひながら、さても淺ましさても淺間し

妄念のやまぬにつけて尊きは、六字の御名を常に忘れず

煩惱の夢を覺すや百八の、珠數をつまぐる胸の安さよ

⊡四月十日花の滿開に付て

嵐山花や紅葉をこきまぜて、限りも知れぬ德を施す

⊡三十六年七月、濱松信行倶樂部建築開場式の際

上もなき道を四方に弘めんと、建る精舍は世々に榮えん

⊡同、信行會を祝して

濱の松音も名高き十八の、信行ふ會ぞめでたき

⊡水口滯在中に因果の道理を深く感じて

我が肉を乘せて輓かるゝ車ひき、屠所へ近づく牛のあはれさ

盛んには人の爲のみ遣はれて、又殺されて肉を施す

罪報をいかに知らずや屠牛者の、世々に大苦を受くるあはれさ

鞭打たれ重き車を引く馬の、我罪業と誰れも知らずや

打殺す其棒を受くる犬取りの、廻る因果はさても恐ろし

首羽根をねじて生毛をむしらるゝ、鷄の地獄は誰が罪ならん

生ながら煮られ燒かるゝ鱗の、焦熱地獄よそに見られず

恐ろしやさかれ燒かるゝ鰻鯰は、大焦熱の苦患ならずや

甲をはがれ生首手足きられ死す、刀劍地獄誰が身なるらん

罪もなき數多の鳥を打つ人の、未來は世々に我身打たるゝ

呑みかまれ喰ひ吸はれする虫類を、よそに眺むる人ぞ悲しき

此世にて借りを返さず死すならば、後世は我身の肉で償ふ

◎京都滯在中、因果經によりて

長壽して無病で暮す其人は、前生で慈悲をなせし果報ぞ
短命と多病の人は過去生で、殺生したる報ひとぞ知れ
器量よく六根揃ふて生るゝは、忍辱柔和の果報なりけり
容貌の醜き人は過去生で、瞋恚の強き報ひとぞ知れ
此世をば一生貧で暮すのは、慳貪邪見の過去のむくひぞ
福德の滿ちて繁昌する家は、三寶供養の果報なりけり
瘖瘂聾盲目いざりと生るゝは、佛法謗し罪業と知れ
子も育ち無病で無事に暮すのは、物の命を救ふ果報ぞ
利根にて聰明智惠のすぐるゝは、學問誦經の功德なりけり
闇鈍で是非善惡の譯らぬは、畜生變化のしるしなりけり

奴婢下劣一生人に遣はるは、過去の負債をなさぬ報ひぞ
業病や難病わづらひ死するのは、破戒三寶謗る罪とが
口中の臭くやみつる其人は、妄語惡口の報ひなりけり
恥をかき恥を知らざる鈍根は、憍慢我慢の過去の報ひぞ
高位にて福德備はる其人は、禮拜恭敬の果報なりけり
唇のかけて生るゝ其人は、魚鰓を穿つ報ひなりけり

◎ある時濱松にて

疲勞ても我にはあらで法の身の、眞實信ずる人の爲には
煩惱の爲に遣ひし此身をも、今は菩提の用につかはる
いつ迄もつきぬ望みを願ふ人、地獄ならでは行き所なし

◎木下氏の富士の掛物に讃をして

一念に阿鼻の地獄を踏みつぶし、富士の高根で月を見るかな

⊡水口西村氏の、舍利頭の掛物に讃をして二首

肉毛とればさながら舍利としりつゝも、上べの皮に迷ふ凡心
肉毛をば其まゝ舍利と悟る人、上べの皮に迷はざりけり

⊡十二月東京にて

身は重く氣根なくなる老の身は、念佛をけふの勤めにぞせん

⊡水口に於て、因果經のこゝろを歌に讀みて

銃獵を好みて殺生する者は、狼のたぐひに後世は生るゝ
長衣着て頭を飾る其者は、戴勝長尾の虫と生るゝ
愚痴にして道理に闇き其者は、牛羊象猪の身とは生るゝ
瞋恚して喜んで人をおどすれば、鷄狼狸鷹の類と生るゝ
他の婦女を好んで姪する其者は、鵝鴨や雀の身とぞ生るゝ
人として好んで殃禍を語るれば、死して野狐の身とは生るゝ

人としてこのんで惡を傳ふれば、死して鴟梟の鳥と生るゝ
神佛の靈地靈山穢すれば、死して屏中の虫と生るゝ
塔寺を破壞し三寶物を私用せば、鴿雀魚鼈獼猴と生るゝ
淨行の尼僧を穢し姪すれば、鐵窟地獄の中に墮落す

⊡三十七半一月

明けてまた念佛申す身のうへは、後世の苦樂はあなたまかせよ

⊡勅題巖上の松の意を

金剛の巖にはへる十八の、松の壽量りなければ

⊡東京滯在中

御佛を穢す心がまた起り、またしてもまたしても
御佛を穢す心が起りなば、直に懺悔の御名を稱へよ
御佛を穢す心のなき時も、御名を稱へて御恩報せよ

善き事は心に思ひ口に出し、身に行ふて身の德とせよ
口にのべ心に思ふ理を、身に行ふが誠なりけり
善き事は身に行ふて他に敎ゆ、是ぞ眞の人といふなり
元日も晦日も同じ心にて、苦樂なければ何つも正月
大晦日さして苦しむ心なく、元日じやとて樂心もなし
元日も晦日も同じ寒さかな

◎ある時京都におひて

善惡も邪正苦樂も迷悟をも、心ひとつの中よりぞ湧く
何もかも心離れて何もなし、山海草木其中にあり
神の道佛の道も儒の道も、心離れて外に道なし

◎安藤觀榮氏の一週年の追弔會に就て卽時に

惜みてもかへらぬ友の一とせを、勤むる人も儚なきの身や

駒の行く月日の早き一とせは、昨日の夢か今日のうつゝか
露の身と口にはいへど心根は、あはん月日の末を待つかな
明日ありと思ふ心の油斷より、今日を空しく送る儚なさ
儚なしと口に無常はいひながら、行末永く賴む凡心
徒に過ぐる月日は早けれど、後世の勤めは後れがちなり
人の機は其緣毎にかはるなり、今日の喜び明日は悲しむ
さるものは日々にうとしといふぞかし、ぬらす袂も日々に忘るゝ

◎大經の世人薄俗の意を

急ぎても猶いそぐべき後世の道、此の世の業は第二第三
急ぐべき後生の勤めはゆるくして、ゆるく世渡る業を急ぐな

◎ある時口ずさみて

石山の石より堅き煩惱心、これを碎くは彌陀の慈悲心

石山の石より堅き金剛心行者に得るが他力心なり

世の中を湖にして勢田いすりや、三井も落雁心唐崎

浮世をば今日限りぞと思ひなば、不信の人も後世頼むらん

限りなき有爲の世話事今はやはや、遁れて無爲の世にも住かな

おのづから有爲の心もあき果てゝ、無爲を樂む心安けれ

四十年御法の道に浴しつゝ、又人をして道に入らしむ

◎三十八年一月

元日や世の目出度きはなんである、餅酒衣裳注連飾りのみ

注連飾り門松建てゝ祝へども、心の内は苦の絶え間なし

鬼といひ佛といふも心から、地獄極樂また心なり

去年もまた夢と立ち消ゆ露身かな

再びと歸らぬ去年も又立ちて、何を目當に世を送るらん

◎或る時濱松にて

年取れば人めでたしと祝へども、年に取られて命短れ

◎煩惱心

思ふやうならぬ浮世ときゝながら、まゝにしやうとて苦しみぞする

◎法喜心

思ふやうならぬとしりし心より、無量壽國を戀したふかな

◎千代の句を感じて

法を得て今は此世をかしくかな

◎清水に滯在の時

待たるゝも待つ人もなき獨身は、南無阿彌陀佛を友連にして

幾度か詠むる毎に變るなり、富士の景色と我心とは

◎無住庵の意を

此世こそ何國も假りの旅枕、うちつく國は南無阿彌陀佛

◎ある時

死に生れ死なぬ命を願はずば、人と生れしかひなからまじ

死に生れ假りの命の内にまた、此妙法に逢ふぞ不可思議

死にに來て假りの財を限りなく、望む人こそ愚なりけり

死にに來て假りの命を延ばさんと、無理な願ひを神や佛に

死ににきて死なぬ命を願ふ人、遂に生死を離れこそすれ

◎三十九年

限りある命を捨てて限りなき、壽祝ふ今朝の初春

生き死にの命も今は無量壽と、なせる佛の慈悲ぞ尊き

百歳とたもてぬ露命持ちながら、何を目當に萬歳といふ

萬歳も萬々歳も限りあり、限りのなきは佛にぞある

上もなき身を受けたりし目的を、知らで惡趣へ歸る哀れさ

◎ある時横濱にて

此雪を凌ぎて咲くや寒椿

水鼻の落ちるも年の暮れぞかし

◎ある時、京都に於て、日頃懈怠者を惜く思ふ念より、不圖心に浮み記す

萬劫に逢ふ事難き信えても、後つゝかねばあふかひもなし

再びと遇へぬ御法に逢ひながら、聞信せざる人ぞ悲しき

信を得て後ち喜ばぬ人達は、亦も惡趣へ沈むなりけり

わからずば懈怠をせずと聽き給へ、いづれ遲くも晴るゝ月影

わからずば譯る迄きけ法の人、もし捨ておかば元のくら闇

懈怠する人はわからぬ證據なり、何を捨てゝも法をすつるな

懈怠する人は諸佛の守護もなし、臨終散亂惡鬼邪魔する
懈怠していざ臨終に望みなば、必ず悔ゆる心多かれ
二度ならぬ臨終大事を誤らば、又も生死の淵に沈まん
度々に勸めさそひて出ぬ人を、かなしや佛の慈悲も及ばじ

◎近江八景にて

石山秋の月

曇りなき月の光りも石山の、重き罪業救ふ願力

三井の晩鐘

三井寺の誓も今は彌陀頼む、鐘の響に浮む水海

粟津の晴嵐

受難き身を受ながら御佛に、粟津歸れば元の惡趣に

比良の暮雪

比良の雪積る跡から消ゆれども、我罪障の雪は消えまじ

堅田の落雁

信心の了解淺くば堅田より、身は落雁で暮す人でも

矢走の歸帆

極樂へ急ぎ矢走の歸帆船、乘れば阿彌陀に任せこそすれ

瀬田の唐橋

世渡りの勢田いもさぞな苦なれども、心の内を唐橋にして

唐崎の老松

唐崎の千歳の松も限りあり、十八公の松は盡せじ

◎横濱滯在の際

座禪する上は殊勝に見ゆるとも、腹の妄想絶ゆるまもなし
座禪工夫聞けば高尚に似たれども若誤れば魔道にぞ入る

八角の甕をこきても聖道の、座禪公案時にあはねば
聖道の自力修行は昔にて、今は他力にすがる外なし
末法は本願他力に依らざれば、座禪觀法時過ぎにけり
頓法の敎へさまゞ〳〵ありぬれど、他力頓法は頓中の頓
佛法の敎の道は多けれど、彌陀の弘願は別願の法
大乘中其大乘の御法とは、彌陀本願の一念の信
我が法は世間普通の法でなし、彌陀願力の眞妙の法

◎私に云ふ、知足の人は、少財たりと雖も常に不自由は覺えざるなり。亦不知足の人は、多財を有すと雖も、何れも不自由勝なり。

◎昔より聞き傳へし語に、眞の信者は國に一人か、郡に一人かといふ。吾れ實地を知らざる時は、さまで少きものかと疑ひしが、其後年數を重ねて各地へ渉り實地を踏み見れば、いかさま眞實の信者の少きに驚き

彼の古語を今更の如くに思ひ深く感承するものなり。

◎私に云ふ、人は露命の延びるを願ふといへども、不老不死の壽を願はず。又、人は僅かに有漏の樂を希ふて、長き後生の安樂を願はず。

◎我が過ちを知るといふは人の手前を耻づるに非ず、我心のつたなきを顧て耻ぢ、之を改むるを、過ちを知るとは申すなり。

◎佛法を修する人、世務の時間を缺きて佛法を聞修すと思へば、世務が首となりて佛法が龐略になるなり。亦佛法を聞信する爲の世務と心得れば、佛法が首となるが故に法を大切に務むるなり。此故に元祖も、佛法を主として世事を客の如くせよとのたまへり。是れ佛法信者の要なり。

◎佛法を修する人、世事の暇を缺きて修法すと思ふは大なる誤りなり。元來、佛法ありての世法なれば、世事の時間は皆是佛法の時間なれ

ば、世事を營む時間は、卽ち佛法の時間を借用すると思ふべきなり。故に佛法を修すると云ふ事は、尤も人たる者の本分なれば、其修法の暇を惜しむといふ道理あるべからず。此の故に大經には、世事を棄てゝ勤行して道德を求めざらんと說き給ふ事なれば、此義能く〳〵心得、佛法の大切なる事を確信したまふべきなり。

◎經中に、地獄へ落ちるに十五の惡相ありと說き給ふに、我れ其地獄へ落ちると云ふ人の、病中より臨終迄、凡そ一ケ月は絕えず傍らに居て其容體を實見せしが、十五相の中、凡そ十相は經說の通り些とも相違無く實に驚き入りしなり。今其實見を茲に記すれば、

第一　智識傍らに居るを嫌ふ。

第二　兩便出るを覺えず。

第三　橫に臥して飮食を爲す。

第四　兩眼を閉ぢて開かず。

第五　うつぶして臥す。

第六　左の腕を下に臥す。

第七　念佛するを嫌ふ。

第八　念佛一聲も出でず、

第九　瞋恚の相顯はれいづ。

第十　看病人等へ物を言ふに、總て瞋る聲を出す。

◎四十年、東京滯在の時解怠者を思ひやりて人前の言ひ譯をして懈怠すりやはるか無信の人が勝れり

吾が好む事にはいつも隙ありて、好まぬ御法を聞くひまはなし

吾が好む酒宴遊興の場所なれば、忙しき中の隙作るなり

聞法の時間が僅か過ぐるなら、退屈顏が目にぞ餘れる

世の中の忙しき儘に取りまぎれ、聞法せざる人ぞ悲しき

雨風や暑さ寒さで懈怠すりや、八寒八熱苦はいかゞせん

八寒や八熱地獄の苦を聞けば、暑さ寒さは物のかずかは

懈怠すりや惡魔隙間が邪魔をする、心ゆるすな我が法の道

法席を我等一人の爲なりと、思や出ずにはどふも居られぬ

聽聞は此座限りと思ひなば、餘念を止めて聞かざるはなし

限りなく佛意に背く我等をば、飽迄救ふ彌陀のなさけは

⊡濱松靜岡滯在の際

地獄だね多く蒔たる我れなれど、今は菩提の種蒔きとなる

善惡の種は其儘はえるゆゑ、善き種蒔きて善き果を得よ

善惡の因果はごうもたがはねど、受くる果報の遲速さまゝ

此世にて寶をあます人々は、慈善の種を多くまかれよ

陰德を積む人でこそ德者なり、財のみ積むは餓鬼道の因

信行の二字を守れる其人は、功德の因を多く蒔かるゝ

⊡森本九右衞門翁の喜の高齡を祝して

喜を祝ふ齡稀なる森本の、なほも命を松に寫して

⊡靜岡滯在の際

散る花の心は誰れもしらなまし、知れば恥かし人心かな

吹く毎に風に任せて散る花の、心なくして法を說くなり

梅や桃、櫻紅葉も法とけど、少しも知らぬ哀れ世の人

⊡水口大會記念の扇に

はる〳〵と四方の法友が集りて、みなくちゞに讃嘆をする

⊡同　大會の折

待ち來る心は同じ法の道、語るもきくもひとつ蓮葉

⊡四十一年一月元旦に

芽出たやな煩惱を申年が來て、御法の席は爰に賑ほふ

⊡橋本かね子氏の返書に三首つけて

何事も彌陀に任する身となれば、よしもあしきも佛のはからひ

罪深き諸佛の慈悲も及ばねど、彌陀にすがれば救ふ本願

身も口も心もともに南無阿彌陀、佛任せの身こそ安けれ

⊡各地及び横濱滯在の際に詠ず十首

生ながら彌陀の淨土へ生るゝは、弘願他力の密意なりけり

往生は生ある內のことなれど、往生する人さても少し

宿善の人ぞ稀なりさりとては、彌陀の御心思ひやらるゝ

此度は何にかゆべき一大事、法に此身を打ちこんでこそ

雨風や暑さ寒さの其折は、猶更進め法の席へは

法席を風雨暑寒が苦になりて、聽かざる人はもとの惡趣へ

濁福を積む程障り重くなる、知らずや人の果てぞ苦しき

濁福を名利の爲に貪りて、奈落苦に沈む人のあはれさ

濁福を不二の山ほど積みたとて、極樂參りの旅費にならねば

濁福が日々に增程極樂の、道遠くなる罪深くなる

⊡東京滯在中十二首、六字を唱ふる事を勸めて

佛名を唱ふる事を勸むるに、なぜ稱へぬぞあはれ皆人

信心を得ても佛名唱へねば、眞實信の人といはれじ

上もなき御法に遇ひし人は皆、御名を唱へて報謝するなり

寤寐に唱へ行住座臥に唱ふれば、積れる罪もやがて消えけり

佛名を常に唱ふる人が身は、諸佛諸神は護念し給ふ

六方の諸佛の護念し給ふは、唯念佛の人に限れり

廣大の功德は念佛するにあり、諸佛は守る惡鬼恐るゝ
念佛の功德は虛空に滿ち〳〵て、稱ふる人の身にぞ納まる
念佛は我佛性を讃るなり、又罪障を懺悔するなり
念佛は名體不離の姿なり、我を離れて稱へこそすれ
眞實の稱名なれば卽來迎、外に待つべき來迎もなし
唱ふるも禮拜するも念ずるも、六字の內にこもらぬはなし

◎ある時三時業の心を

此世にて蒔きたる種が直こゝで、生るを順現業といふなり
此世にて蒔きたる種が來世にて、はえて報ふが順次業なり
此世にて蒔きたる種が三五世と、後にはえるが順後業なり

◎各地巡回中にて

寤寐六字行住座臥も六字なり、言ふも思ふも六つの働き

はたき持ち箒をもつも南無阿彌陀、六字唱へて塵を拂へよ
名號は佛の御名か我れが名か、唱へて見れば二つなきなり
一心に南無阿彌陀佛を唱ふれば、心も消えて身もなかりけり
一向に南無阿彌陀佛を唱ふれば、佛凡夫の差別なきなり
唱へつゝ箸とり筆とり算を持つ、商內するも六字離れず

◎四十一年四月九日、東京地方櫻花滿開の最中、大雪四五寸降り積り

櫻木多く枝折れ諸木を損害し、電信電話の損所其數を知れず、期不順候に就て

櫻咲く雪降り積る不時候は、濁惡心のしるしなりけり
善惡の心につけて天候も、順と不順の色をあらはす

◎大會の際記念の帛紗に

皇國の都をさしてあつまれる、法池の蓮も妙音の友

◎ある時詠じて

秋來ればいつも紅葉は紅葉なれど、菩提の色に染る人稀

世の中はかなわぬ事の多きゆゑ、急ぎて願へ安樂の國

まゝならぬ浮世と誰も言ひながら、儘にしやうとて心苦しむ

有がたや嬉し涙があつまれば、終に功德の大海となる

晴れ渡る月を友にて西へ行く、彌陀の御國に住む身と思へば

月は見て今は心もあり明の、西に入るこそ樂かりけり

◎四十二年一月酉歳に就て

元日や國家こうの一聲で、夜のほんのりと夢も覺めけり

信心をいよ〳〵酉の年がきて、國ゆたかに心安かれ

元日や天地に響く鳥の聲

◎勅題松に雪

十八の松にかゝりし白雪も、朝日に消ゆる常盤木の色

◎濱松社に滯在中、懈怠者を思ふて

懈怠する人ほど死をば惜むなり、覺悟をなせし人は勇まし

終りほど人の大事はなかりけり、若しあやまてば二度と返らじ

終りには泣きつらかわき後悔す、知らずや哀れ世の中の人

臨終に嘆き悲しむ有さまを、側の妻子も助けやうなし

哀れなや又此度も沈むかな、御法信せぬ人の身のうへ

何故にこの信心が喜べぬ、疑ひ深き愚痴つよき人

萬億の金にかはれぬ此信を、たゞ捨るとは扨もきの毒

法の席常に懈怠のならざるは、生死を離る一大事ゆゑ

人の身に一大事とは何事ぞ、生死解脱に勝れるはなし

逢がたき御法にあふて其譯を、聞かざる人は人皮畜生

萬劫に逢ふ事難き此法に、遇ふて喜ぶ人ぞかしこき
遇ふ事のいかにも稀な法に逢ひ、聞信するは猶も稀なり

◎又各地において

深信の人は譬へば不二の山、世に二つなき希有の好人
此世をば願ふ人のみ多かりて、後世の勤めはとかく怠る
後の世を願ふて此世を勤めなば、二世安樂の功德備はる
信心を得ても聞信せぬ人は、又も惡趣に沈むなりけり
白隱の片手の聲が聞きたくば、南無阿彌陀佛の主に逢ふべし
聞きがたき片手の聲を聞くよりも、六字の譯をきゝて信せよ
世の中をわしが〳〵でなるならば、貧と病と死とは止めたし

◎本願の餘道に勝るゝを思ひて

聖道の敎へありても今の世は、他力の道にすがる外なし

◎蠶の功德を思ひて

桑にあるか蠶にあるか白糸の、世を救はるゝ功德尊し
白糸となせる蠶のはたらきも、元をたゝせば佛の光明

◎衆生恩を思ひて

天地も日月山川大海も、只一佛の惠みなりけり
炭薪五穀野菜も何もかも、元光明の妙惠なりけり

◎四月、水口新規催しの際花を見て

散りやすき花よりもろき身を持ちて、よ所に眺むる心傷なし
散り易き花の姿は知りながら、我身の散るを忘れぬるかな
咲き揃ふ花の姿も法の道、生住異滅の相を說くなり
年毎にきれいに咲くや櫻花、人の見る目の有無はいはまじ
うるはしき花の色相其まゝに、我が佛性の妙用と知れ

◎京都大會の際

法の花かほりをしたふ四方の友、西の都に開く大會

◎今日慎みの事

一朝起き夜る臥すにも、家内中相互に挨拶を爲し總じて禮儀を正格にすべき事。

一家中の人々朝夕佛前に向ひ敬禮を厚くすべき事

一三度の食事を戴くに奇麗に食し、味噌汁煮汁等も洒きて飲み、又米一粒青菜一とすべも粗末にせざれば、冥加にかなひ老て不自由はせざるなり。

一食事の菜なるべく野菜を多くし、肉食を少くするを、第一身體の健康と且長壽を持つなり。肉食を多くするは却て健康を害し、又短命にして殺生罪とも成るべし。之を例せば、市中の人民よりも農民には

健康と長壽者の多きにて知るべきなり。

一酒は佛の戒めなれど、好く人は成るべく控へて飲むも可なり。若、過分に飲めば意散亂し、或は恚怒を生じ、或は人と爭ひ、或は病疾を起し終に命を短縮する事なり。

一衣食住は華美に流れぬやう總て質素にするは、子孫繁榮の基とは成るなり。

一飽食飽飲は腸胃を毀し天命たもちがたし。

一水火の御恩を思ひ、精々粗末に使用せぬ樣幷に炭を無用の時焚かぬやう注意あるべき事。

一上り下りに履物を脱ぎ捨てぬやう、便所へ行きて出る時は、草履を廻し揃へて出るべき事。又便所の前へ、滴をたらさぬ樣注意あるべし。

一便所の落し紙に新聞紙を使用する家柄も有るべし、是大成る罪障と

はなるなり。其譯は新聞紙には日月及び佛神の御心、佛語幷に皇室の尊名も記載しあれば、第一、是等に對しても恐慎すべきは當然の道理なり。

一夜る寢るには燈火を消して臥する事、夜中まで光明の御苦勞を懸るは勿體なき次第なり。

一臥床に付いてから煙草を吸ひ朝も手水を遣はぬ先に煙草を飲むは大陽を穢し粗略にするなり。先づ朝起きれば第一佛前へ御光りを燈し禮拜の後、觀音の垂迹たる光明を戴くべき事。

一朝寢と夜更しは健康の害とは成るなり。

一人は房事を慎まざれば、健康と長壽は保ちがたし。

一外歩行中、大地へ唾を吐くは甚宜しからず。若し吐かんとする時は、溝へ吐くか、或は紙にて取るべし。又、所によりて草々の上を踏

まぬやう、草木の枝花も猥に折り取るは罪にて有るなり。

一禽獸等に食物を施與するは、人に施すよりも功德大なりと佛も說き給ふなれば、例へ小虫たりとも精々與へられたき事。

一神佛へ詣でゝ無理なる願望を爲せば、靈驗はなくして却て御罰を受くる事。

一人は義理と人情を欠かざれば、信用は失はざるなり。

一何事につけても堪忍を能く守れば、大成る幸福とはなるなり。

一人に對しても妄語惡口等は堅く慎むべき事。

一足る事を知りて强欲心を起さざれば、一家平和なり。

一悲怒は自他の災害となれば深く慎むべき事。

一總て、無益のことに精神を勞し無駄事の思案を爲すは、之身體の障害となれば、是等を能心うべき事。

一人は、身分相當に因德慈善を爲さんければならず、日々三錢五錢乃至三五十錢は、無益に遣ふ事まゝあれば、是れ等を能注意し、例へば僅少づゝたりとも夫を貯蓄して功德に用ひらるべし。

右の通道德に志す人は、是等の箇條は常に守行可被成事。

明治四十二酉の九月

◎十二月二十七日、濱松にて

暮かゝる月日も早き駒の足、急がずとても先へ近づく
老の身は猶更願へ法の道、六字の杖を常にはなすな

◎四十三年一月戊の年元旦に

正月や外相ばかりを祝へども、心を祝ふ人は稀なり
目出度しといふもあとなりあら玉の、綠色ます庭の常盤木
新年といはぬ先からあら玉の、四時を惠みの主し祝ふらむ

煩惱の犬はうせねどさながらに、障りとならぬ念佛の德
念佛の德におそれて煩惱の犬は卑下する遠慮するなり
常念に稱ふる人は煩惱の犬も菩提の助力とはなる
元日も晦日も佛の惠日なり、念佛信ずる人は常樂
大晦日さして苦しむ心なく、元日じやとて樂みもなし
大晦日越すに苦樂のある事は、常に用意の有無にぞありける

◎元旦に、各社へ出送する年賀狀の歌に添へて

常念佛の人は元日晦日の差別なく、心を苦樂に置かざる故に常安樂なり。念佛信せぬ人は、常に心を差別のみに置くが故に、或は苦み或は樂み、或は迷亂して大樂を願はず、悲哉。

◎今春濱松に滯在の際

老の後さても昔を見歸れば、只功もなき事のみぞかし

つくゞと昔を思ふ老が身の、とかく罪なることぞ多かれ
世の人は罪を罪とも知らねども、思ふもいふも皆罪のさた
罪業を作る此身と氣がつかば、常に念佛の心忘るな
罪作る功德をなすも同じ身の、苦樂善惡また心から
限りなく世々に作りし罪咎も、彌陀なればこそ救ひ給はる
憂き事は貴賤貧富も同じ事、淨土は苦なき樂の境界
骸は何國の里にすつるとも、心は彌陀の國を離れず
骸骨は何國の土になるとても、心は不滅彌陀の同體

◎一月十五日の明月を詠めて

晴れわたる月もろともに西へ行く、彌陀の御國も遙ならねば
月を見て今は心も有明の、西に入るこそ樂かりけり

◎四十二年より同三年へかけて、各地に詠じたる雜歌

面影のかくも變りしものなりと、我身ながらも見違へぞする
面影のかはるが毎に思ひます、彌陀の御國ぞ猶ほも戀しき
親の慈悲深きも限りありぬれど、限り知られぬ佛の大慈悲
わからずば解る迄聞け法の人、懈怠をすれば尙ほもわからず
わかる迄聞き得る人のあるならば、佛もさこそ嬉しかるらん
當にする物を忘れてあてならぬ、ものに苦しむ世の中の人
不滅なる我本體を忘れ果て、假りの此身を賴む儚なさ
身を粉にし骨も碎くる心にて、飽迄盡せ法の爲には
暑き日に流るゝ汗をぬぐひつゝ、大悲のあつさ思ひやらるゝ
あふぐれば冷しき法の風出でゝ、苦熱の念も忘られぞする
家内中なかよくするが福の神、不和で暮すは貧乏神なり
日々に腹立て不足で暮しなば、貧乏神は喜びぞする

佛法を一家揃ふてよろこばゞ、神も佛も側を離れず
安樂の傳授といふは此身をば、死人となりて世を渡るなり
生ながら死して浮世を渡りなば、よしあしともに心易かれ

◎ある人への書面中へ

法に逢ふ人も多かる其中に、斯く深信の人は稀なり
仰がるゝ心の内ぞ耻かしく、外相ばかりの智識顔して

◎二月二十四日より、京都に於て五六日間風邪にて引籠もりたる二十七日の夜、不圖浮みて息の歌十首

神の道佛の道も儒の道も、息を知るより知る物はなし
神儒佛敎への道はかはれども、つまる所は息の一つよ
悟るとぞ餘所を尋ぬる事なかれ、息を悟れよ息が佛よ
眞理をば發見したくば息悟れ、息が眞理ぢや息が如來ぢや

息一つ悟れば夫が佛なり、座禪公案この外になし
我れ人も牛馬も狐狸も蚤も蚊も、此息ゆゑに活て働く
息を知れ息さへ知れば息佛、息が命ぢや息が世界よ
日月も山海國土草も木も、この息一つの作用なりけり
息は是れ世界の寶身のたから、不生不滅の主なりけり
八萬の釋迦の御法も外ならず、たゞ息主を知らせんが爲

◎現世利益和讃の意、十首

一心に南無阿彌陀佛を唱ふれば、七難消えて七福を得る
一心に南無阿彌陀佛を唱ふれば、三世の罪も薄少となる
一心に南無阿彌陀佛を唱ふれば、現當二世の利益得るなり
一心に南無阿彌陀佛を唱ふれば、梵王帝釋諸天守らん
一心に南無阿彌陀佛を唱ふれば、四天は守護す惡鬼しりぞく

一心に南無阿彌陀佛を唱ふれば、堅牢地祇は尊敬したまふ
一心に南無阿彌陀佛を唱ふれば、閻魔法王晝夜守らん
一心に南無阿彌陀佛を唱ふれば、天地に滿つる惡鬼恐るゝ
一心に南無阿彌陀佛を唱ふれば、觀音勢至影護し給ふ
一心に南無阿彌陀佛を唱ふれば、十方諸佛喜護をなさるゝ

◎阿彌陀經六方段の意を

專心に南無阿彌陀佛を唱ふれば、六方諸佛護りしたまふ

◎念佛の功德を稱讃して

忘るまじ念佛行者の心得は、安心起行六字名號
念佛の德にまされる物はなし、地獄の苦が極樂となる
正念に御名を稱ふる人は皆、福德壽は身にぞ備はる
正念に南無阿彌陀佛を唱ふれば南無阿彌陀佛の姿とぞなる

正念に南無阿彌陀佛を唱ふれば、十界もなく元の一心
正念に御名を稱ふる心こそ、其まゝ彌陀の姿なりけり
ありがたや南無阿彌陀佛の上からは、善惡苦樂皆うその川

◎雜歌

活神は我が身に有るをしらずして、外社を祈りて無理なくり言
柏手の內にまします御靈をば、知る人ぞなき神歎くらん
生ながら彌陀の淨土へ生るゝは、弘願他力の外にあらじな
彌陀佛の誓の網に救はれて、法の御船に乘るぞ嬉しき
生れなば夜に日にすゝむ死出の旅、打ち付く宿を急ぎ定めよ
猫の目のかはると同じ人心、喜怒愛樂は時々にあらはる
心から十の姿とわかれども、願ふは元の無我の一心
つくづくと昔思へば恐ろしく、今は樂き國に住むかな

立派なる袈裟や衣は着飾れど、悟りに暗き寺の上人
今時に悟りは何んのさとりぞや、公座をやりて魔道へ落なよ
有がたやまた嬉しやな仕合な、念佛行者の身こそ尊き
言ひ殘す言葉は常に法の道、今は六字の御名の外なし

◎夢の雜歌

何事も夢の浮世と悟らずば、いつか惡夢の覺め時もなし
恐ろ敷日夜に夢を見ながらも、まだ覺めやらぬ夢の夢人
見る事も聞くも語るもなす業も、寢るも起きるも夢の境界
夜の夢は晝の思ひを夢に見る、覺夢は共に同じ夢なり
夢の世に夢の衆生が夢見して、夢の一期を夢ではてぬる
夢人が夢の心で夢くらし、夢で泣いたり夢で笑ろたり
夢の世に夢の親子やゆめ夫婦、夢で喜び夢で悲しみ

夢の身に夢の衣食や夢住居、行住座臥も夢の業かな
夢覺める人ぞすくなし夢の世を、夢ではつるはさても悲しき
夢の世を悟らん爲に生れきて、夢に惑ふて猶夢を見る
夢なりと思ふ心も夢なれや、夢の外なる世を知らぬかな
夢覺むる敎へに逢へば覺めるなり、さなくば夢の覺める折なし

◎八月酷暑の際

暑くとも御名を唱ふる人ならば、心の内は涼しかりけり
唱ふれば涼しき風の吹き出て、苦しき胸の暑さ忘るゝ

◎或る時

受難き身に生れたる目的を、知らず夢中で果つる人かな
何ゆゑに人と生れしものなりや、其わけしれる人ぞ少なし
御佛の供養の品は多けれど、我身供ずる人はなきなり

捨た身も又取りかへし苦を造る、捨て切る事は稀のまれなり

◎死といふ事に就きて

まう死ぬる口と心が同じくば、いつ死んだとて貪着もなし
まだ死なぬもちつといやれ大事ない、法の爲なら百も二百も
まう死なぬ死なぬ身となる嬉しさは、六字の國へ生れゆくなり

◎四十四年亥の年一月元旦に、靜觀園の座敷より不二山を眺めて

四海浪靜に御代も治まりて、朝日に照す富士の白雪

◎亥の年をかけて

一向に亥の獅子首のごとくにて、脇目をせずと信を取るべし

◎清水滯在の際

穢身こそ何國の土になるとても、心は不滅彌陀の懷ろ
身を粉にし骨を碎くも菩薩行、飽迄盡せ我が法の道

元よりも御法の爲に生れ來て、法で果るはめでたかりけり

◎濱松滯在中に口ずさみて

往き易き御法をしたふ人ぞなき、實に〳〵惜しき世の中の人
增てよき念佛の數はまさずして、增て悲しき胸の妄念

◎四月、京都にて老苦の歌

年寄れば若きものには嫌はれて、立居もつらく居るかひもなし
面影の變る衰苦ぞ老の身は、不自由勝なる身こそつらけれ
汗止めば直にかはりて水鼻の、落ちるもつらき老の身ぞうき
身體はきたなくなりて皺がより、肉はなくなり骨皮となる
くどくなる氣根なくなる物忘る、欲深くなる愚痴强くなる。
耳はなる眼はかすむ齒は抜る、死は近くなる苦は多くなる

◎六月、京都にて

苦を樂になしかへよとて慈悲の父母、しばしもやすむみこゝろはなし
苦を樂になさしめたまふ御佛の、御恩たふとや御名を忘れじ

⊡東京滯在の時

金錢のくさりの繩にしばられて、自由にならぬ身ぞあはれなり
金持ちの心の内を見るならば、五欲三毒みちてきたなし
後世の道修する心も忘れはて、浮世の業に身をゆだねつゝ
因あれば果と報ゆることわりを、知らぬ人こそ邪見なりけり
種蒔きて實を取る事を知るごとく、善惡ともに因果離れず
是程に助けます彌陀佛を、賴まぬ人の心にくさよ

⊡十一月、横濱滯在の時

死んで見よ死なぬ命の顯はるゝ、死ぬる人こそ無量壽となる
世の中を死して暮せば氣も安く、命も延びて無病息才

家内中死人になりて暮しなば、五欲三毒住む處なし
日々に死ぬる稽古を勤むれば、死なぬ命を見付けこそすれ
捨た身も又取りかへす凡心は、いまだ生死の離れざる人

⊡ある時

美しく言葉の花は咲かせども、實とならざれば惜む人かな

⊡四十五年一月元旦に

ばつと夜が明けてめでたし今朝の春

⊡四十五年子年をかけて

始終護念子どしに歸る新玉の、念佛行者の身こそ尊き
あら玉の子年に歸る法の身は、ます〳〵すゝみ信を取るべし

⊡草庵に於て

駿河なる迎ひの山に庵居して、御名唱へつゝ不二を見るかな

◎或時口ずさみて

釜こげにきはまりし身に光りをば、受くる阿彌陀の慈悲ぞ尊し

いづれから見ても奈落へおつる身を、救ひ給ふは大悲ならずや

忘れじと思ふ尻から忘るゝは、南無阿彌陀佛の御名にこそあれ

木の枝に造る住家はさゝがにの、もろき無常を餘所に見るかな

老人のくり言いふに引かへて、南無阿彌陀佛と口ぐせにせよ

◎法がありても名利の離れ難きを詠みて

極樂の議員となりし身を持ちて、婆婆の議員を望む悲しさ

念佛のさまたげとなる世話ごとを、望みて爲すは名利凡心

惜みても返らぬ露命持ちながら、世に遺はるゝ人ぞ氣の毒

我が家の世話ばかりにてあき足らず、世間名利の世話ぞしたがる

◎或時京都にて

當ならぬ物を當にす心より、當がちがひし時に苦しむ

當になる物をあてせず當ならぬ、物を當にす心轉倒

形ある物は一つも當ならず、形なきこそ當になるなり

世の人の有相を實と思ふより、眞の相を忘れぬるかな

生滅の假相に心止むゆゑ、迷ひ生死は離れざりけり

生死なく善惡苦樂なき處、是ぞ眞の世界なりけり

◎三惡道の歌

足納の心なくして金錢を、貪る人は餓鬼道に入る

僅かなることに瞋恚を燃やす人、やがて地獄の釜こげと成る

愚痴强く道理に暗き其人は、畜生界に又も生るる

◎五月二十五日、大垣より歸庵し、取りあへず佛間へ參り拜禮せし處

佛檀には華はなく木の葉の枝が一本備へあり、これはと存じ四方

を見廻りし處、人の手をさへぬあざみの花が美しく咲きてあるを取あへず備へたり。此時口ずさみて

花たへて佛に備ふあざみかな

己が身の針をしらずやあざみ草

向に置き眺めておれやあざみ草、手に取る故に怪我をするなり

手に觸れず向にさへ置きやあざみ草、さはらぬものに怪我はなければ

花姿わるくなけれどあざみ草、針もつゆゑに人に嫌はる

◎六月二十日、田道を通行せしに、田の土手に生ているあざみ草を刈て、田の中へ突き込むを見て、左にあざみ草針そのまゝのこやしかな

◎自信教人信と口に述ぶるものゝ、中々容易のことにあらず。總じて、自分の事は第二となし、法の爲には、身命財を厭ふ意なく盡瘁する人

は、是菩薩行にして之を自信教人信の人と云ふ。實に其人を得ることは甚希有なり。

信を得る人を大別して、甲乙丙の三種に分けて是をいはゞ、

甲の人は、自身の信仰を精勵するのみならず、又人を勸誘し倶に增信せしむ、是卽ち菩薩心なり。

是を喩へていはゞ、人より結構なる馳走を貰ひて、其れを幾人へも分配し悅ばせる如くなり。

乙の人は、自身に信ずと雖も他をして誘導する心のなきをいふ。是れ卽ち聲聞心なり。

是を喩へていはゞ、彼の貰ひし馳走を、只自分のみ喰ふて他の者へ分配せざる如くなり。

丙の人は、稀に得たる信心を自分も聞信せず、懈怠に懈怠を重ねて相續

せざるが故に、況して他を誘導する心ある事なし。是れ卽ち畜生心なり。

是を喩へていはゞ、節角貫ひし彼馳走を、押入などへ仕舞込みて食ふ事を忘れ、遂に腐敗して捨るが如し。

◎我家の事でさへ、夜中に小用に行が、ふとしヒヨイと起きて出所を間違はすことが能くあるもので、是を胴に迷ふといひます。今信心の行者も其如く、平素相續をして居てさへ、どうやらすると、一朝事の出來たる時は大に思惑違ひといふ事がある、まして、平生油斷がちの人は隙終の間際にのぞみなば、果して胴に迷ひ狼狽する事なれば、ゆめ〳〵不相續してはなりませぬ。

◎草庵にて無常を思ふより

誰も皆一息ごとに消えてゆく、行先いかゞ油斷大敵

惜みても時々に消えゆく老の身は、御名を稱ふる外やなからむ

泡と出て霜と消えゆく露の身に、何を止めて我ものとせん

爰に浮きかしこに消ゆる水の泡儚なき身とは誰れも知らずや

◎六月二十二日、草庵にて

惜むべき法の爲には一日も、永らへ彌陀の恩を報せよ

命をば御法の爲に永らへて、有緣の人を導きやせん

法の爲いづれ此世は去るとても、又身をかへて盡さんと思ふ

◎同二十四日

平生になしたる財は身につかず、身に付くものは惡業の罪

◎今朝、秋山の畑地を見廻りしに、小さな畑がいくつもありて、隣地でありながら、一方は瓜、芋、南瓜が生々發育してをります。又一方は、同じ類の作物なれど、宛然發育しておらぬ。依つて如何なる譯かを問まし

たれば、發生しよいといふ地は、從來作物する際に肥料が澤山遣りてある。其肥が充分きゝてある故能く出來るといふ。又一方の發育せぬ地は、是迄作物のしてない地ゆゑ肥料が遣りてなき爲に、發育をせぬといふ。今是を思ふに、宿善の有無も如是である。宿善深厚の人は得後の相續に懈怠なく勇進するゆゑに、能く道理が了解して發達が早いのであります。是が恰度平素作物して肥料の充分利きてある地のやうなものである。又是に反して、宿善薄少の人は聞法に懈怠するが故に、信心の道理を了解する事能はず。是が恰度、植物をせぬ肥なき瘠地の如く、種を蒔きても容易に發育せぬやうなものであります。依つて之になぞらへ、有信の人は皆々奮勵なさるゝが肝要であります。

⊡念佛行者へ勸告す

念佛の行者たるもの、百千萬劫難相遇の法緣に巡り逢ひて、既に、一念歸命の際、無始曠已來の輪廻生死の惡業を一時に切斷して、正定衆不退の位なんどに住し、剩つさへ、盡未來際に到る大苦患をも遁るゝと云ふ、無限絕大の仕合せを授得したる此大恩は如何ばかりでありましやう。餘り功德が廣大過ぎて、迚も言語や事物を以て之を稱讃する事も、又比校することもできぬ。陳ば、其尊き謂れを聞信する爲の例席なれば、縱へ何用があらうとも、其を差繰して其會日を待ち時間も早く出席せねばならぬ筈なるに、其歡喜の形色ある人は恐らく僅少にして、動もすればとかく欠席者が多數となり、其上、時間も後れがちに成るといふは、そも何たる不覺ではありませぬか。實に是等の人をさして無德者と云ふか、橫着者と申さうか、箇樣な有樣では、折角寶山へ入りて、而も其寶を得ながら、其寶の價値が分らぬから、其廣大無量の寶を輕々手ばなして再び本の惡趣卽ち三途へ戻るとは、餘り殘念至極なれば、此邊篤々深考

あつて、他迄勇進せねば、暫時も懈怠してはなりませぬ。穴賢南無阿彌陀佛。

◎愚老常に思念するは、如何にして懈怠者を再發させるものか、精々懈怠者を惹起したきものと種々苦慮する折柄、去る九月の頃、不圖一つの譬を浮びし儘、筆を執り爰に書す。

一年三百六十五日の終り大晦日には、貸借及び仕拂ひを一先奇麗に計算して、後へ面倒の殘らぬやうらち明けをするといふが、世間一般であります。

其如く、今人間一生の善惡苦樂の計算時は何つでありますか。是吾人の臨終際であつて、此時は一生中長の年月、夜るに晝に拵へたる妄念煩惱の大借を、一時奇麗に計算するのであるから、一ケ年大晦日の計算位な生やさしひのではありませぬ。そこで此計算の場合に臨めば、貴賤

貧富男女にかゝはらず、十中の九九迄も、皆思惑違ひにて轉倒するのであります。然るに、其臨終の際に顚倒もせず、自若とし奇麗に計算する事のできると云法が有るので夫は何であるかといへば、お互ひ兼て覺悟の平生業成である。此平生業成とは常に聞信をよくし、及び行住坐臥の念佛であります。其如く、念々稱名常懺悔の人であるならば、妄念煩惱の計算は其時々くできるが故に、何時臨終の大晦日が來たとて別段驚きもせず、平生臨終の故に、差て計算する世話もないわけであります。此意を譬ていはゞ、日々買物すれば、直ぐ其場で現金拂ひしてしまふやうなもの、之を隨犯隨懺と申して種々の緣に觸れて、妄念が起れば直ぐと念佛するが故に、其妄念は忽ちに消滅するので、らちのあひたるものである。是が卽ち平生業成念佛の利益と申すのであります。又是に反して平素懈怠勝の人は、譬ば日々澤山買物をしながら、借錢ばかりし

て仕拂ひせぬやうなものである。そこで、何つしか計算の塲合が來れば意外に澤山成る仕拂故に、大に當惑して非常に煩悶せにやならぬ。畢竟之は當然の事にて、今も此譬の如く、平素八釜敷催促を受ても出席せぬ人の臨終大晦日には、惡念煩惱の大借が一時に責め掛け來れば、果して顚倒狼狽し日頃の意思とは大間違ひと成つて、俄に後悔するのは知れ切つた話であります。是が卽ち平素懈怠を爲したる咎にして、自業自得の苦患にして、其上親子兄弟夫婦等に再びと逢へぬ別れの悲しみ或は一生夢中になつて求得したる財產を惜む念慮、或は自體を惜む歎き、それやこれやの苦念が一時に責めかけると共に、斷末魔の苦痛が又迫り來る故に、七顚八倒して虛空を掴まんとするはなんと恐しひではありませぬか。此時俄に天に祈り地に伏して助けを乞ふても、更に益なくして亦もや元の惡趣へ沈むのでありますから、斯樣な塲合にな

らぬ先に、急ぎて聞信し懺悔を爲して常に念佛をせにやならぬと云ふ事をお勸め申すのであります。併し、かやうに聞いて見れば、實怖ろ敷くて、容易に懈怠してはおれますまいと思ふ。去りながら、亦皆さんの御心はいかゞでありますか、篤と御思案下されませ。

◎船の譬へ

平生業成の人と平素懈怠の人と是を喩へていはば、平素船に乘り馴れたる人は、若し風波が强くして船が動搖すればとて、少しも暈ふこともなく又驚怖もせずして、其動搖する中で酒も呑めば飯も食ひ、剩つさへ鼻歌の一とつも謠うといふ、誠に平氣なものであります。今此法も其如く、平生業成に金剛心の人は、一朝にしていかなる變事が起り、假令生死に關する塲合に望むといふとも、爰が平生の覺悟日頃の相續はこゝぞと心沈着して動搖せず、成りし事を明きらめ愚痴執着の念もなく

敢て死も惜まざるのであります。又是に反して、船に乘り馴れざる人は、少敷風波強くして船が動搖すると、忽ち驚亂嘔吐し胸な騷ぎを爲し飲食どころか、顏色も靑くなつて、非常に煩悶するのであります。今此法も其如く、平素懈怠して聽聞せざる人は、縱へ信心ありとて世間無信の人に敢て變りなく、何か非常の出來事にあへば忽ち動亂し周章して俄に叶はぬ時の神頼みをする樣な轉倒心が起るのであります。斯る場合に臨みてから、日頃の後悔をいかほどなすとても更に其益なき事ですから、此譬への如くいかなる浮世の難波に出逢ふとも、其れに動亂せず強て又貪着もせず、心易く世渡りを爲し、命終に臨まば正念にして往生を遂げらるゝといふは、卽ち是れ日頃の聞信及び念佛相續の外はありませぬ。故にどうか一期の間は飽迄懈怠なく、何方も御勤めが一大事であります。南無阿彌陀佛。

◎茸山の譬

十月水口滯在の時

水口倶樂部より僅か十町足らずの松茸山へ誘はれて、社員の男女三十名計りとお相伴を致しました。各〻熱心に搜し取らんとする人は果して澤山取られたのであります。又別段取らうといふ心なく、只四方を虛かゝ眺めている人は、足下に生ていても氣が付かぬといふやうなもので、今信心の行者も其如く、熱心に聽聞して憶念稱名する人は、果して安心治定の地位に至り、菩提涅槃の妙果を得るので、是が卽ち彼の茸を熱心に搜して澤山取り得たる人の如く、心地觀經に曰、人の手なければ、寶の山に至ると雖も終に所得なきが如し、信の手なき者は三寶に逢ふと雖も所得なし。

又同じ行者ありながら、不熱心の人は此大信心をさほど有難しとも尊ひとも思はず、依つて安心決定して菩提の妙果が得たいと云ふ心もな

く、假令聽聞を爲すと雖も只人前の信心計りにして、うか〳〵と聞き流す故に、極めて安心を治定する事ができぬ。是が恰も其茸山へ到りながら、其茸を搜し取らうといふ心なく、只うか〳〵と四方を眺めて少しも取らぬ人の如くであります。依つて、不信の人は早く心を翻へして深信の人となり、此法寶を篤と手握りして菩提の妙果を得るが尤も必要であります。

⊠珠數の說法　京都滯在の時

珠數を常に持ちて念佛すれば、其珠數に自然と光澤が出て美しくなる若し是を半年も持たずして仕舞ふて置けば、たちまち光澤はなくなるのみならず、剩へかびが來て穢くなるのであります。今お互の信仰に於ても其如く、平素聞法に油斷なく而も稱念する人は、心光の利益を蒙り常に此人を諸佛は照護し給ふ。是に反して聞信もせず常に懈怠に流れて相續もせず、況して念佛せざる人は、必竟信心あつて無きも同樣ゆへに、攝取の心光も照護し給はざるのみならず、剩へ未來は又も惡趣に墮落して、大苦を受ねばならぬといふは、さても悲しき事ではありませぬか。是必竟我が所持する珠數に對しても、現に信と不信の道理を說法して見せて下さるのであります、念佛の行者たる者は一層勇猛に厚く信せねばなりますまい。

⊠ランプの說法

ランプの油が絕へると其塲が闇くなり、油を絕やさゞれば其塲卽ち明くなり。今念佛の行者も其如く、不斷念佛の油が絕へると煩惱の闇覆ふて信心の燈火消へなんとす、されど念佛相續の油が絕へざれば、心光の照護益々明かなり。

⊠霧の喩　丹波社にて

京都の西山を越へて丹波地へ參ると、天氣の朝は、多く霧が降りて僅の先も見へぬのであります。是に等しく、我らの胸の中は妄念煩惱の雲霧が朝も晝も晩も絶へ間なく降る故に、攝取の心光を常に覆ひ隱すと云ふは實に勿體なき次第であります。必竟外の霧を見るにつけても我が心中を覆ふ霧雲を懺悔すると共に、稱名相續するが卽ち念々稱名常懺悔の意であります。

我が胸に夜る晝る覆ふ霧雲を、南無阿彌陀佛の風ではらへよ

㊀楓の說法　丹波に滯在の時

楓は、人の知る通り、春より芽出し初夏になれば枝葉繁りて綠の色美しく、秋が來ればそろ〳〵紅葉し始め、秋末には一層紅色を增のであります。

古歌に　雨露に打たるればこそ楓葉も、錦とかわる秋の夕ぐれ

此歌の如く、春より夏、夏より秋と、多日の間雨露に打たれ又霜に濡れするが故に、紅葉の時來れば、錦織立つやうに立派なる紅色を顯はすので若し、此楓が雨露に打たれず、又霜にもぬれざれば、紅葉の秋が來ても本の青葉のまゝで楓の所詮はないのであります。今お互に念佛行者の身も、一念歸命の信心を得れば信後の相續に油斷なく一向專念に修行して常に念佛する人は、恰も楓の雨露に打たれ霜にぬれて紅葉の色をあらはす如くなれども、若し懈怠して聞信せざる時は、彼の楓の青葉まゝにて散るも同樣なもので、折角得難き信心を得たる益はないのであります。依つて大經には、一世の勤苦は須臾の間なりと雖も、後には無量壽佛の國に生れて快樂得ること極まりなし、とある如く、我等一生中懈怠なく專心に勤行すれば、後生は極樂淨土に生れて量りなき快樂を得るぞとのたまふ。故に、一度攝取の功益を得たれば、飽くまで懈怠を

せぬやう益〻奮勵をなし、信心歡喜の錦色を顯し、一期の間は報謝の稱名退轉なく相續するが、尤も一大事であります。

◎十一月上旬京都に滯在中、正像末和讃の身を粉にし骨を碎きても
の深き御意をつく〻と思ふに就て、左の歌を詠ず

身を粉にし骨を碎くる行ひを、身に顯はして報恩をせよ
身を粉にし骨を碎くるよろこびと、口に出して御名を稱へよ
身を粉にし骨を碎くる意にて、大悲の恩を人に知らせよ

◎丹波社より四方を眺めて

柿櫻うるし葉までも紅葉して、楓の色をいや增にけり
柿櫻うるし葉までも紅葉して、人を惠みの慈悲ぞ尊とし

◎十一月十六日、京都より東京へ直行する汽車中、念佛の尊きを思ひて左の如く

南無阿彌陀南無阿彌陀佛と唱ふれば、南無阿彌陀佛に生れこそすれ
一心に南無阿彌陀佛を唱ふれば、南無阿彌陀佛の姿とぞ成る
一念の信心得たる其後は、唯念佛を口ぐせにして
南無阿彌陀佛任せの身の上は、寢ても覺めても南無阿彌陀佛
南無を賴み阿彌陀と救ふ心こそ、凡佛不二の姿なりけり
罪咎も次第に消ゆる念佛の、功德尊し御名を離れず
念佛を常に稱ふる人は皆、諸佛諸神も護念したまふ
念佛の行者となりて念佛の、もうされざるは扨もかなしき
念佛を申さぬ人ぞ悲しけれ、たとへ信心ある身たりとも
念佛する身でありながら唱へぬは、眞の行者と申されもせず
念佛の申されざるは何故ぞ、罪障重き印なりけり
念佛を唱ふる度に罪きへて、極樂參りの足のかるさよ

⊡十二月中旬、草庵に於て、我等が妄念に對する念佛の必要なる事を聊か筆に著記す。

先づ、世間の人は二段として、今念佛の行者と成りし身は、此念佛行者の四文字に對しても念佛は不斷に唱へねばならず。其故は、人々心中に起す處の妄念煩惱と云ふものは、晝夜不斷にして僅か一分時間の絶へ間もなくして、種々の念が入れかはり差替はり、起るのである。ソコデ其妄念煩惱を退治するは、念佛の利益ゆゑに念佛も又不斷唱へねばならぬのであります。依つて不斷念佛すれば、即ち念佛の利益に恐れて妄念煩惱は起る尻から消滅するので、之を譬ていはゞ、日光の照しへ雪が降りても積る事なく、降るに尻から〳〵消ゆるなり。今妄念煩惱に對する念佛も其如く、妄念は絶へ間なく起りても、念佛不斷勤むれば妄念を永くとゞむる事なく、直に消滅するので、是を善導も、念々稱名常懺悔とは仰せられたるなり。然るに妄念は不斷にして念佛に絶へ間があるとすれば、愈〻妄念は強盛となりて、念佛の勢力が弱く衰へるならば、遂に妄念の爲に惡道へ引入れらるゝなり。依つて念佛は不斷行住座臥に勤行せずには居られぬといふ譯は、是にて分明でありましやう。

⊡此文に就て妄念の歌六首

妄念は絶へ間なきゆゑ念佛も、絶へざるやうに唱ふるがよし
妄念は命あるうち止まざれば、命の限り念佛をせよ
妄念に負ず唱へよ念佛を、若し怠れば惡道へひく
妄念の起るとともに念佛を、勵みて唱ふ人ぞめでたし
妄念と念佛と角力するならば、妄に劣るな負を取るまじ
妄念に負ず劣らず念佛し、遂に妄念打ちとげて見よ

⊡十二月下旬

罪障も一先づ拂ふ年の暮れ、身にあら玉の春を向へん

◎大正二年一月牛歳

おこたらず牛にひかれて極樂の國へ近づく法のとも人

◎一月二日の朝、佛間座敷の掃除をなしつゝ不圖思ひて左に書す。

家の内の塵埃は目に見ゆるも多けれど、微塵の埃がどれ程あるかもしれぬ。依つて朝夕の掃除は勿論風でも強く吹けば日に三五度も箒を持たねばならぬ、是を思ふにつけても、我等が身中の貪瞋煩惱等の塵埃は、晝夜不斷にどれほどあるかも知れぬ。

道綽禪師の云く　一日一夜に八億四千の念あり、皆是れ三途の業と仰られた。

永觀律師の云く　一念惡を發せば一生の惡身を得、十念惡を起せば十生の惡身を受く、乃至千萬億の念も復爾りと云々。

今此の祖語の如く、一日一夜でさへも八億四千の念とある、是を十年二十年乃至五六十年の永き間造りたる塵埃は、どんなに成るものか迚も計れるやうなものではない、なんと恐ろしひではありませぬか。併し此夥敷塵埃を掃除するは、どうしてしまふものか、是他なし念佛の箒を持ちて、行住座臥に拂ひ出し掃き出すのであります。

古歌にも「日々につもりとつもる塵埃り、南無阿彌陀佛は箒なりけり」とあり、此とほりですからお互ひ念佛の箒は、暫時もはなす事のできぬのであります。

◎一月四日、無常を思ふと共に筆をとりて左に書す。

平素入用物が臨終には却て大障害物とはなる。

平素念佛の懈怠が、臨終には大障害とはなるなり。

始めの平素入用物が臨終には却て大障害と成るとは、平素は妻子も

入用又眷屬も入用物なれども、臨終の場に到り若愛執の念に引かれなば、却て臨終一大事の大障害物とは成るなり。

亦財産衣服諸道具等も平素は一日も缺くべからざる入用物なれども、臨終の際其財物等に執着すれば、却て臨終の大障害物とはなるなり。

次に亦田畑山林も平素は入用物なれども、若臨終の時惜念すれば、却て臨終の大障害物とは成るなり。

第二に、平素念佛の懈怠が臨終には却て大障害とはなると云ふは、念佛は平素入用なれども多くは今日の雜用に取り紛れて、平素其念佛を怠る故に思はず臨終には大に後悔の色を顯し煩悶して、必ず臨終の大事を誤る。是卽ち大障害ならずや、實に嘆敷有樣なり。依つて何はさて置きても念佛は懈怠せぬやう相續せねばならず、そこで相續さへできるならば、其念佛の利益により、臨終には妻子財物等に執着する念

慮も離れて、めでたく正念往生を遂げらるゝですから、少しも疑心なく信受し實行せねばならむのであります。

◎一月十一日夜、机に向ひ寂々我等の轉倒心を思ふに就けて、取り敢ず筆を取りて左に書記す。

吾人は常に當にならぬ心又當にならぬ物を當にするが故に、一朝變事の起りたる際、或は思惑のはづれたる時には、大に煩悶するのであります。又是に反して確と當に成りて而も萬代不易と云ふものが有るお互は其を忘れたると云ふ寧ろ知らぬのである。依つて常に迷苦の絶え間がないのである。

扨、始めに申たる當にならぬ心とは何んであるかといへば、物の緣に觸る毎に起る心で、譬ていはゞ金を見れば直ほしい心が起り、喰ひ物を見れば喰ひたい心が起り、よき着物を見れば直求めたき心が起ると云

ふ。或は朝の思惑が晝に變り、晝の思惑が晩には變轉する心、或は朝の喜びが午後には悲しみと變り、晝の樂みたる心が早晩には苦しみと變化すると云ふ心であるから、斯やうな心は一切當にならぬのではありませぬか。

次に、當にならぬ物とは何んであるかといへば、親子、兄弟、夫婦、並に金錢、財物、家、藏、諸道具等、是一とつも當にならぬので、先づ一家族の者互に死に別れ、或は生別れもし、或は財産とてもいつ何時燒失するやら、流失するやら、或は盜人に取られるやら些とも當にならぬ。斯樣な當にならぬ物を當にすると云ふが卽ち小人凡夫である。實に迷心の轉倒ではありますまいか。

次には、是に反して、確かに當になりて而も萬代不易のものとは何をいふかといへば、抑、是は宇宙の眞理天地萬象の本體である。此眞理

本體も餘處計りと思ふにあらず、現に我等が身體を作用なせる主人公である。此本體本性こそ不生不滅にして、古今に變滅すると云ふ事なき故に、萬代不易と申したのであるから、是計りは確かに當にせにやならぬ尊體を今迄知らずして、上記の如く當にならぬ物ばかりを當にし便りにならぬ物を便りとせしは如何にも愚な事である。依つて其轉倒心を早く飜へして、本來の眞心を識得し、何事も此眞心の作用に打任せて世を樂く送りなば、是程間違ひのなきめでたき手柄はないのであります。

◎爰に記載する佛法修行の一說は、舊冬より思ひ付きて居りましたが、遂、用事の爲に今一月十五日と成りました。

佛法修行に就て眞實生死を離れんと心指す人は、先づ聞信行の三つが揃はねばならぬ。此聞信行といふ事は、譬へていはゞ、三足鼎の如く、此

鼎と云ふは三本足の鍋の事にして、若三本足が一本缺けても物を煮る事ができぬと同樣、今念佛の行者も聞信行の三つが揃はねば、眞實の安心は得られぬ。ソコデ、第一の聞とはきくと云ふ、僅に一ヶ年や三年聞いて其で分つたの解らぬのといふ樣な淺墓な佛法ではないです。依つて此聞は飽迄も熱心に聞かねば跡の信行が出てこないのであります。畢竟は、命のあらむ限り一向專念に聞くを聞と云ふ。

次に、信といふは聞より起る信にして、此信も一時の信仰でなく、聞で申たる如く、一期の間は專心に信せねばならぬので、或時は信じ或時は信せぬと云ふやうな信仰なれば、眞實の信とは申されぬ。依つてどこまでも聞信の離れぬ樣聞より信を起し信より又聞を勸めるといふやうに、聞信ならび勵みて相續するを深信と申すのであります。

其次に、行とは、聞信の上から顯はるゝ行ひにして、眞實聞信する人は稱

禮念の三つは自然と具備するので、其れが卽ち行である。シテ、稱禮念の稱とは行住座臥口に稱名し讃嘆する事、禮とは禮拜恭敬の事にて、阿彌陀佛を唯一向に禮拜し恭敬する事を云ふ。念とは、阿彌陀佛を一向專心に憶念する事。依つて此の稱禮念の三つを一期の間勤行し相續すると共に、自信敎人信の働き、行も長時不退に爲す是を行と云ふ。是れ等の人を名づけて、佛は希有最勝人とも妙好人とも眞實の念佛行者とあのたまふ。依つてお互此勤行は是非實行致さねば、本統の安心立命は得られぬのであります。

◎本日は斯樣な事を不圖思ひ付きましたので、取り敢ず是へ記載致しました。一月十六日

世間の學問や遊藝でも、三年や五年遣つたのでは、其れはほんの門口へ入つた位のものですから、人に聞かせるの見せらるゝのと云ふもので

はない。凡そ一人前の學藝者と人にいはれ知られる迄は、少くも十年已上乃至十五年位は熱心に遣らねばなりますまい。畢竟、世間の學藝でさへ斯の如く、況して廣大無限の佛法修行に於ては、此道理を以て知るべしであります。然るに他力本願の敎へを受けて、得後の聞法相續も僅に三年や五年の聽聞では、それはほんの門口のお話しと申さねばならぬ。處が中には其僅の聽聞を聞きかじりて、もう私は解つたの、いや私は悟つたから聽聞するに及ばぬ抔と聞き誤りする人が有るには甚迷惑千萬であります。そこで、眞實安心を治定して金剛堅固の信心者と成るには、一生相續したとて限りはなければ、併し十五年や二十年は一向に懈怠なく而も熱心に相續のできる人であれば、其人は必ず佛の御加護を受け、自然と妙境を得て、念佛行者の行業が三業に備はるに至る。全體此法緣の人は爰迄辛抱して修行を遣り遂げんければ

實は所詮のなき事ですから、此義は何方も是非實行なされん事を希望するのであります。

◎今朝斯樣なことを思ひ付きしまゝ、是へ記載したのであります。

一月二十日

世間の遊藝抔は、別段知らずとも今日の世渡りに差支ないので、エテ藝事があると其藝を人に見せたく、又聞かせたいと云ふ心が起り、其れが爲に餘計な時間を消費して却て業務の妨げとなれば、一層さやうな藝事は知らない方が安心でありましやう。トコロが、今人身の上に於て貴賤貧富を問はず、誰も彼も是非習ひ知らねばならぬ要事があるを、人々其れを忘れて居る。それは何かといへば後生の一大事である。之は尤も現世に於て、若きうちより速に心得置かねば、世は無常迅速なるが故に、今にも臨終と云ふ場合に於て其覺悟なければ、未來はまるで

闇黒である。依つて此一大事の後生を知得するには、有縁の善知識に逢ひて親しく其道理を聽聞し、其上教へを受けて彌陀如來に一念歸命し奉れば、願力の不思議に依つて無始曠已來の惡業煩惱を一時に消滅し、而も此身は穢土にありながら極樂の分人と定まりて、再び六道へは立ち戻らぬと云ふ絶大無二の仕合せを得るので、其後は長時に其仕合せの譯柄を聽聞し、自他相互に此利益を歎び念佛稱名爲しつゝめでたく日暮しをすると云ふ、嗚呼何と宏大不思議の敎ではありますまいか。依つて何は知らずとも、又何の心得が無くとも、此後生の一大事こそ、確かに覺知して置かねばならぬ、人間最大一の目的なれば、急ぎて其敎授の知識に逢ふが肝要でありましやう。

◎昨夜臥床中に斯樣な事を思ひましたまゝを、爰へ記載するのであります。一月二十四日

日本全國中で、不二山を見たる人は十中の一でもあらうかと思はれる位であります。然るに愚老は京都に生れて、たまに不二を見るでなく奇妙な因緣で而も駿河國清水迎山に一つの菴を結び是に住て居れば不二は行住坐臥目前に眺むる事ができるのであります。併し其不二を眺むるに就きても、忽ち手許にましまする佛を行住坐臥に拜見せねばならぬので、其佛を拜見すると云ふは何んでしやう、是れ他に非ず、稱名念佛卽ち佛を拜見するの謂はれなれば、外の不二を見るにつけても、第一、この佛を行住坐臥不斷に拜見せねばならぬのであります。二つなき法に逢ひつゝ二つなき、不二をながめて御名唱へつゝ

◎今爰へ記載するのは四五日前に思ひつきていたのを、今日是れへ書しまする。一月廿五日

此濱の近海へ、今春早々から毎夜の如く鰯漁が澤山あるので、而も大船

に二はいの三ばい取れたのといふて、之を四斗桶へ入れると何百ばいとなるそうです。又之を鰯の數にして見たならば、ソリヤ何千萬疋とでもなるでしやう。其れが爲に此邊の漁師は思はずの金儲けであるから、大喜びなれど迷惑千萬なのは鰯である。我が命を取られながら別段恨みもせず、剩つさへ命を取りし漁師へ澤山なる利益を與へてやるといふは、些と理窟が合はぬけれど、コリヤ鰯の業でなく天地自然の惠みを人身へ救濟し賜はるのであります。シテ、其夥敷ひ鰯を遠近の人が食ふのみに非ず、其れを又、茶、桑及び野菜抔の肥料に用ゆる、何んと尊ひ功德ではありませぬか。之が則ち四恩の中の衆生恩の僅か一歩分であります。

トコロガ此鰯を我等お互ひの身上に取りて考へて見たならばどうでありますか。人が鰯を自由に取り扱ふ如く、人の體を自由自儘にする大なる動物が若あつて、彼の大網を空からおろして、千萬億も一と網にすくひ上げ命を取り殺すとあつたならば、全體どんな心持ちであるか鰯の如く恨む念もなくて殺されるでしやうか。其網の中には親子、兄弟、夫婦、姉妹等もあり、或は主、家來もあれば師弟子もあり、高下貧富、誰れ彼れのと云ふ用捨なく命を取られるのである。何んとお互が其樣な慘酷ひめに逢ふたならば、恨みも不足もいはずにはおられますまい。能く此邊考へて見にやならむであります。之は鰯の譬へと思ひ餘所に見ていてはならぬ。畢竟、形體こそ變り佛性にかはりはない。依つて世は無常迅速なれば、いついかなる變事に逢ふてお互ひ命を失ふかもしれぬ、此無常迅速と云ふ事は平素能く覺悟をして居らにやならぬ。又因果の道理を深く感じて見れば、鰯の慘酷なめに逢ふて命を亡ぼすも、決して餘所事偶然でないといふ譯も、明了することができるのであ

ります。

◎現當二世の幸福を得る事

世人の幸福を希望する時之一般の事なれど、其幸福に二種ある。一には有爲の幸福(有爲とは現世の事)二には無爲の幸福(無爲とは安樂淨土の事)、して有爲の幸福とは金錢、財寶、山林、田畑、及び爵位等を希望し得る事なり。縱へ其幸福を得るとても、現世一旦の幸福なれば、僅かに三十年乃至五十年間にして永久持ち得る事難し、動れば其幸福の爲に、身を害し心を惱ます事世間に其例少からず。近くは日々新聞紙上にて明かなり、故に有爲の福を罪福とも又濁福とも申すのであります。

二に無爲の幸福とは、之は他力念佛の敎へを受けて、後生は安養淨土へ往生を遂げるといふ事なり。此無爲の幸福を得るには先づ第一敎授の善知識に遇ひて聞法して敎へを受け、一念彌陀に歸命しぬれば、此身

は穢土に有ながら無始已來六道輪廻の惡業煩惱を一時に消滅し、安樂淨土に往生して而も永劫無量の快樂を受るので、之を念佛往生と云ふ絕大無二の幸福にて有るなり。今此大幸福を僅かなる有爲の小福に比すれば、百千萬億倍勝れるなり。併しながら、唯單に念佛といへば、人々其譯も知らずして忌み嫌ふ者あり、或は念佛は臨終の場合に申ものと心へ、或は若き者の念佛すれば、陰氣になりて早く死ぬるものと思ふ者もあり。畢竟是等の人々は頭で念佛の譯を知らずして、斯く誤りをいふも悲しき事なり。依つて此念佛の謂はれを簡短に申さば、

抑念佛とは、佛を念ずるとも又佛をおもふとも、いふ。シテ其佛は如何なる佛ぞと云ふに、之諸佛に勝りたる阿彌陀佛を指す。其阿彌陀佛とは、天竺の語(印度の事)(今日でいふ)是を唐土(今日ふ支那)では無量壽佛と云ふ、我國では量りなき壽の佛といふ。不生不滅にして卽ち無量壽佛なり。然るに

人は第一死を嫌ひ、死を恐怖するにあらずや。依つて吾人が其生死を離れたる無量壽佛を念ずれば、而も無量壽佛と一體に成ることができるのである。故に此無量壽佛を念ずるが卽ち念佛なり、之を口に出して唱ふるを稱名念佛と云ふ。依つて念佛するといふ事は陰氣どころでなく、早く死ぬる處ろか、殊更長壽のできるめでたきことなれども、此謂を知らざる人は、かほど有がたき念佛を忌み嫌ふとは以ての外の間違なり。シテ又其念佛の佛を念ずると云ふに就いて、其佛は何れにましますかといふに、遙か十萬億土の西にいますといふのみに非ずして之を手近くいへば、現在吾人が命の體卽ち之無量壽佛なり。又行住坐臥見聞覺知する活動はとりも直さず無量壽佛の光明なり。猶又無量壽佛の光明は、宇宙法界に遍滿して、我等人間始め禽獸、虫魚等の動物及び山河大地大海草木五穀一切萬物の本體にして、其萬物を生育ならしめ、普く我等を救濟し給ふのである。然るに若無量壽佛の光明なかりせば、斯一切萬物は、忽ち死物となるのみならず、剩へ日月の照曜もなくなりて全く世界は殘らず闇黑とはなりぬ。嗚呼無量壽佛の光明こそ尊きにあらずや。依つて此佛を念ずるが是れ眞の念佛にして、又我等が本體を念ずるなり。シテ我等が身體も斯く生存して自由自在に活動するも、畢竟、私の所作にあらず、一切是皆無量壽佛の大悲光明なり。斯る謂れを知らずして、今迄此肉體を我物と思ひ、行住坐臥及び見聞き嗅ぎ味ひ身に觸れ心に善惡苦樂等を知るも、皆我が所作と心得しは大なる誤りなり。元來我れの己れのといふもの毫末もあるべからず、萬事萬端は、皆是無量壽佛光明の作用なりといふ道理を篤と了知すれば、今迄永年間誤解せし罪を懺悔するに至るなり。其懺悔を深くすると共に、不斷念佛勤行して能く相續するならば、自然と罪滅生善の理

に適ひ、而も現世からして非常成る利益を蒙る事、更に疑ひなし。依つて、其利益の要を概略していはゞ左の如くなり。

一、人道を行ひ、一家和睦し、商賣繁榮す。
一、諸人の信用を得て寵愛を受る。
一、名利と我慢、慳貪心を離る。
一、父母の恩の深厚なるを思ふ。
一、國君の恩を常に忘れず。
一、衆生恩の有難きを知る。
一、三寶の恩を深く信ず。
一、惡疫傳染病の恐患ひなし。
一、七難消滅して猶七福を得る。
一、心快樂の故に無病にして長壽を受る。

一、十惡を慎み十善を守る。
一、六道に輪廻する恐れなきを喜ぶ。
一、因果を信じ、堪忍を能守る。
一、眞理を悟り其德を萬事に應用す。
一、慈心を起して衆生を愛憐するに到る。
一、常に念佛怠る事なく。
一、諸佛諸神に晝夜護念せらる。
一、後生は安樂淨土に往生す。

斯やうなる宏大無限の利益を蒙ることは、是れ全く無爲の幸福を授かり并に不斷念佛の餘德なり。何んとお互ひ現世の利益でさへも容易の事に非ず、況して無爲の利益において、未來は佛果涅槃の悟りを開くと云ふ宏大無量の利益に依つて消滅し、

なる事は、到底言語や筆紙を以て述べ現すべからざる大利無上なり。

問ふ 箇程尊き二世安樂の念佛をなどか皆人の唱へざらんや。

答ふ 是は畢竟無爲の幸福に因緣なき人は、彼の教授の知識に遇はざるが故に斯るめでたき念佛の謂れをも知らず、知らざるが故に念稱せざるなり。

抑、此念佛の利益を施し給ふことは無量壽佛卽ち阿彌陀佛の本願なり、又此念佛利益を說き給ふ事は釋迦世尊の本懷なり。又六方の諸佛は念佛する者を證誠し給ひ、歷代七高祖は念佛往生を證明し給ふ。故に末世の凡夫は、唯此念佛の教法を一向に信受して念稱すれば、斯く申す如く、彌陀釋迦並に、高祖善知識の本意に適ふが故に、諸佛諸神にも護念せられて 地自然の道理にも適ふ、依つて念佛の行人は、士農工商皆今日爲す處の業務は日に月に繁榮せしめ、小は一家の幸福となり、中は町村市郡に及び、大は一國迄も其利益を圓滿ならしめ、天下も泰平、五穀滿作、七難等の憂へも遁れて現當二世の利益を得る事は、さても尊き教へならずや。依つて何はさて置き、彼の無爲の幸福を授る善知識に逢ひて、其教授を得て後は一期の間懈怠なく聞信し、念佛相續すれば後生はめでたく淨土に往生を遂ぐるのでありますから、此無爲の幸福を得る事は絕大特別なるべし。

☒これへ記載しまするは、昨夜の夢見に就て、我等へ御說法下さるゝ趣意は左の如く。 一月三十日

お互ひ夜中の夢といふものは若き時より爲し來りたる善惡苦樂の有さまに就て、何を見るかもしれぬ。其行爲の中に善行といふ事は恐らくは少いのであります。そして、今日の爲業を其夜に見るかと思へば翌夜は三十年五十年の昔に爲せし事柄を見ると云ふやうなもので、一

切譯が分らぬ。其如く、お互ひ臨終最期の一念に永年爲し來りし善惡苦樂の如何なる念意が起るかもしれぬ。是は我が計らふべきにあらず、實に一大事とは此場合なり。併しながら平素心を重くして憶持する事は、果して最期の場合に其念意の顯はるゝ道理にて、之を譬ていはゝ、立木の片向きゆがみたる方へ倒るゝは當然の如く、世法に心重くし常に五欲に貪着しておれば、果して三途へ到る事となり、又佛法に志深くして法喜が憶念なれば、必ず臨終は正念にして淨土へ往生するは之又當然の道理なり。依つて信心の行者としてはともかくも、佛法を主とし世間を第二と爲し世を送る事肝要であります。

◎本日は二月一日なれば、何か一說記書致したきと存じ不圖斯樣な事を浮びしは、左の如く、

一切は唯心造と申して、善でも惡でも苦でも樂でも迷ひでも悟りも正

も邪も喜ぶも悲むも怒るも愛するも憎むも可愛も恨みも愁も、總て皆心の作用にして、心は何にでも成るのであります。依つて古歌にも、

傀儡師胸に掛けたる人形箱、佛出そうと鬼を出そうと

斯の如く先づ心を善き方へ持ちゆれば、佛にもなりや神にも成る。或は菩薩ともなれば聖人君子ともなる。或は佛法に志を起し自覺して多數の人を濟度するも、或は國君の爲に身命財を拋ちて盡すも、或は主人へ忠し親へ孝をなすも、或は慈善をして人を救助するも、其作用次第で尊き働きができるのであります。トコロが、此作用を惡き方へ持ちゆると、甚だ怖ろしひので、是をあら〳〵申してみれば、窃盗するも强盗を働くも、或は親殺し主殺しするも、或は放火を爲して多數の人を困難させるも、或は不忠不孝をするも、或は人へ金錢の迷惑をかけるも、或は喧嘩口論して人に疵つけ又は殺すも、或は詐僞を働ひて人の物を掠

め取るも、或は地獄の鬼を作るも餓鬼となるも畜生道へ落るも、是皆心の爲業である。日々夜々、心の作用は實に無量無限であります。依つて萬事心に就て注意せんければ、うつかり油斷しておるとトンデモナイ心が起るのでありますから、お互ひ惡心は精々謹慎し、善心は縱へ小なりとも、其善事について實行するが人たる者の所詮であらうと存じまする。

◎二月二日、今朝斯やうな事をうかびしまゝを左に記す。

念佛行者の身となりなば、稱名念佛は行住座臥、聲に出して唱へむければ肝心の信あつて行が缺けたるのであります、是を譬て申さば、人鶯を稱美して飼ひ養ふは、是申すに及ばず麗しき鳴聲を賞嘆するのでありましやう。若此鶯に鳴き聲なく啞でありたならば誰あつて飼ふ者もなき如く、今念佛行者の身に稱名の麗しき聲出さざれば、折角の信心を得ても佛は其人を賞讃し給はず、是大に行者の要心なり。

◎同日、梅花を見て左の如く

念佛行者を梅花に譬て申しみれば、此花には好き香の匂ふが如く、今行者の身の上において、念佛稱名の好き香は必らずあらわれねばならぬなり。若行者の身にして稱名の香なき時は、梅花に香のなきやうなものなれば、斯く梅花に準へても、不斷稱名の必ず要用なることはしらるゝなり。

◎二月三日、思ひうかびしは左の通り

我等衆生は久敷く無明長夜の闇黑世界に住居せし者なるを、此度宿善開發して大悲の願力に救はれ、一度三途を離れて無量光明世界へ出して貰ひしものゝ、元より惡業强き我等は、此光明世界の有がたき謂れを聞く事を好まずして、動もすれば元の闇黑界へ戻らむとする有樣は、如

何にも悲しき事であります。是を譬ていはゞ、眼病人は、とかく明るき場所を嫌ひて成るべく闇き室へ入らむとするが如く、佛縁に薄き人は佛も一層御心を碎かせ給ふは、實に勿體なき事ではありませぬか。

◎同日

愚老は、皆さんへ稱名相續の事を毎度癖のやうにお勸めを申すのであります。ソリヤなせならば、我等が妄念煩惱は一日一夜に八億四千とある如く、些とも絶へ間がないのであります。依つて稱名念佛も、行住座臥絶へ間なきやう唱へねばなりませぬ。若お互ひ此妄念に絶へ間があるならば、又稱名に絶へ間ありても宜しからうが、悲しひかな吾が妄念煩惱には更に休息なきが故に、是を助くる念佛も不斷にして休息なく唱せざれば、妄念の業力を鎮靜する事ならず。故に善導大師も、念々稱名常懺悔とは仰せられたるなり。是が卽ち常不斷にして稱名相續の意である。不斷稱名すれば、而も惡念妄想心も、念々稱名の功德に依つて常懺悔となり消滅するのであります。依つて何方も能く此道理を承知して、稱名相續は飽迄致さねばなりませぬ。

◎二月四日の記載

是は昨年秋の事で些と不淨なお話ですが、或時不圖飲料の水にする水溜壺の蓋を取りましたれば、而も其清水の中に糞虫が一疋泳いでおるが目にとまりたので、思はずア、穢い〳〵、いつの間にかやうな糞虫が這入たものか、能く氣をつけにやならぬと申しましたが、其漉水に凡そ三斗ばかり入る壺に八分目程ありしが、彼の不淨虫一疋の爲に澤山なる漉水なれど、外へ用ゆるも心惡く、勿體なくも捨てたやうな譯でありました。併し後で能く思ひますれば、彼の虫は糞虫であるから穢き虫には相違なけれども、其糞虫より千萬倍穢き虫が、而もお互の身中にマ

アどれ程住居しておるかも知れぬ。其れを別段不淨ともなさけないとも思はず、能くこらへたものであります。シテ此惡虫の名前をあら〳〵申してみれば、第一に貪欲虫、其から瞋恚虫、愚痴虫、殺生虫、偷盜虫、邪婬虫、妄語虫、惡口虫、綺語虫、兩舌虫、其から我慢虫、自慢虫、邪見虫、嫉妬虫、悋氣虫、癇癪虫、食欲虫、財欲虫、色欲虫、名欲虫、睡眠虫、不孝虫、不忠虫、吝嗇虫、身勝手虫、酒ずき虫、喧嘩虫、理窟虫、遊びづき虫、のらつき虫、商賣嫌ひ虫、朝寢ぼ虫、夜深し虫、道樂虫、まだ〳〵澤山なる虫なれど此位にして置きましやう。かやうな惡虫が互にあらはれたり喧嘩始めたり、或は威を爭ふたりして何つも腹中を騷がし苦るしめるといへども、お互は能く辛抱したものであります。亦其糞虫は人に對して惡さもせず害もせねども、煩惱の惡虫は我身を害するのみならず、他人の身迄も障害する事が往々できるのであります。ソコデお互此惡毒虫を退治する譯には參

りませねど、精々害をせぬやう注意せなければなりませぬ。併し此虫の暴れぬやうおとなしくさせる妙藥があるので、其れは何かといへば是れ六字の丸藥にて、此六字丸を一心不亂に稱へつゝ一度服用すれば煩惱卽ち菩提と轉ずる如く、此惡毒虫が轉じて善虫とはなりぬ。然れども後々續ひて服用せざれば、動もすると又元の惡毒の氣が指したがるゆゑに、此丸藥を怠らず常に服用せねばならむので、依つて服用を忘れざれば、一度善虫と成りし應用の利めが自然とあらはれ、六字丸の効能を自分も信じ、又人にも敎へて信仰させると云ふ有がたき行爲ができるのであります。昔は惡毒の業を爲して自他共に障害をなせし虫が、今は毒藥變じて藥と成る如く、法の爲に助業と成るとは是單に願力の不思議であります。依つてお互何はともあれ、此六字丸を精々服用する事に勉めるが何よりの肝要であります。

◎二月五日左の如く

元祖大師の曰、實の心なくば實の心の起るまで念佛申べしと。此言は極簡短にして肝要と存じまする。人は實が本であつて、若人に實の心なくば人とは申されぬ。此世を不實で渉る事は到底できる譯なものでない。然れども、若不實心の人にしても、不斷念佛を唱へる事ができたならば、ソリヤ自然と其不實心が眞實心と轉ずるやうになるのであります。其譯如何とならば、不斷念佛を申人が、マサカ親に對して不孝もできますまい。又主人に勤務する人、能念佛しますれば不忠の心も持てないでしやう。夫婦相互ひに念佛申して喧嘩のできるものではない。又他人と交際するに、お互ひ念佛を申しておれば、言はずして實の交際ができて行くに間違はない。總じて高下貧富及士農工商、常に能く念佛申しさへすれば自然と實の心が起りて、不實といふ事は心に恥て爲せるものでない。ソコデ此利益の念佛を全國中の人が悉く申すならば、其れこそ眞理に適ひて天下も泰平五穀も豐作し、國家に災害もなくなり、惡疫傳染病も寄り付く憂ひなく、盜難の按じもなく、遂に監獄を設置する必要もなくなり、又巡査警察裁判官も無用と成るに至る。なんと是程めでたい手間隙入らず金いらず、念佛申し〳〵一切の業務もでき、剩へ三才の小兒迄も容易く念佛の申せると云ふ有がたひ念佛なれば、誰れ彼れなしに一刻も急ぎ念佛なされるが、實の御祈禱であります。

◎二月六日浮みしは左記の如く

信心を得ざる昔は、只此世々々と此世を重くして、何事も現世が大事となりて後生といふことはまるで念頭に置かず、輕々敷思ひし事でありましやう。是を譬ていはゝ、現世を本籍本宅と爲して、後世を借宅寄留

とする樣なものであります。トコロガ信心を獲得せし已後能々聞信し相續すれば、今まで本籍本宅と心へたる現世が、何んとなく頼みがひなきやうに思はれ、殊に有爲轉變無常迅速の緣にも逢へば、浮世の儚なき有さまが身にしみ〴〵と感じられて來るが爲に、是迄の思惑がゴロリかはりて愈〳〵後生の一大事なる譯を了解するに至る故に、信前の心が反對して後生が本籍本宅と變り、現世が寄留借宅と成るに至るも、是單に大悲念力の然る故なり。此意を顯名抄に、

今生をば借の宿と思ひて、是が爲に執着をなすことなかれ。後生をば永世の樂果と心へて、其れが爲に身財を惜むべからずと。

全く此法語の如くなれば、此世は暫し借の宿りの寄留なれば、心を止めて執着を爲してはならず。後生は永世の樂果にして安養の淨土なれば、法の爲には身命財を厭ひ惜まず抛ちて堅固に聞信し、念稱怠らぬやうせねばならむのであります。

◎二月七日、今日爰へ記載するのは、昨年に思ひ付きしを訂正して書しまする

我國には花紅葉の場所が澤山ありて、其時候になれば何んとなく人氣が浮き〳〵する。ソコデ汽車汽船電車等にて遠近の人が數多出かけるのであります。是に對して各府縣の呉服店始め、西洋小間物店、時計店、帽子、蝙蝠、傘店、履物店、其外諸店も澤山商内をして利益を得まする。其の又各商店の物品を製造する各工業者の手許へも、其れが爲に利益を得るのであります。是れ畢竟は皆花紅葉のお蔭と申さねばならぬ。其れから又花紅葉の場所へ行きて見ると、料理店には一ぱい人の這入つている。茶店もつまつている。壽し店、酒店、菓子店、餅だんご店、果物店、煙草店、煮賣屋店、又は所の名產物店、其外でんがく、しるこ、甘酒といふ

樣な出し店等も澤山な事、總て中等以下の人達も花紅葉の爲にお蔭を受け助かるも夥いのであります。是卽ち四恩の中の衆生恩の一部分である。シテ又此花紅葉を只向ふに眺め、之で一ぱい飲もふかと、花紅葉をダシにして飲食を樂みとするは、花紅葉こそ迷惑千萬である。畢竟、花紅葉をして人の目を歡ばせるも之天地の惠みにして、數多の人へ無限の利益を施與して世界を潤澤ならしめるので、其實、花紅葉の細工に非ず、此根源は何んであるか、爰らの妙味を篤と考へて御らうじませ。恐らくは其處へ心づきて花紅葉を眺むる人は少からうと思ふのであります。又此お話を最一歩進んで申てみれば、花を咲かせるも紅葉するも之が卽ち彌陀今現在の說法にして、生者必滅無常迅速の有樣を、而も無言にして其色相に說法されてある。之が本當の活說法、此活說法を見聞させたいばつかりの佛の大慈悲である。畢竟言舌の說法は第二第三であります。ナントお互ひ意外ではありませぬか。依つて是等の眞理妙用を能々了解せんければ、只外相計りを眺めて其本源を知らざれば、實際花紅葉へ對して恥かしい譯ではありませぬか。

二月八日の記載

私は數十年前、京都に於て、或時牛が四疋繫かれて屠所へ行くに、其內の二疋は、牛そのものゝ肉を載せて戻る車を引かせて行きました。其れを見て思はず身振ひし、其節斯の一首を浮かびて

我が肉を乘せて引かるゝ車引き、屠所へ近づく牛のあはれさ

其實、私は是迄は折々牛肉も喰ひましたなれども、此時限り斷然止めたのであります。既に摩耶經にも

譬へば、旃陀羅の牛を驅りて屠殺の場所に至らしむるに、步々死地に近づくが如く、人命の死に近づくは疾きこと此に過ぎたり。と。

全く此御教説の如く毫末も相違なき事にして、此無常迅速はお互ひ身に迫りて來るなれば、暫時も油斷せず急ぎ平生業成の覺悟して置かねば忽ち我が身の一大事であります。

◎同日

世俗にも人間僅か五十年と申しまするが、其れは先差置きて、五十歳已上長壽する人に對してみれば、五十歳の人が向ふ十年假りに命をたもつとして、此十年を日數に直せば三千六百五十日僅かなものである。よし最う十年延して七十歳の古稀迄生るとして、此二十年の日數七千三百日となる。一寸永ひやうではありますなれど、さてお互ひ百日や二百日は瞬間に立つので、最ふ一年立つた、最二年過ぎたといふやうに其れは早い事でありましやう。別して年を取りて月日の立つは格別の樣に思はれるのであります。

六度集經に曰、譬へば水の山より下るが如し、晝夜進み疾くして須臾も止むことなし。人の命の過ぎ去ることは、此山水よりも疾きなり、と。斯の如く儚なき有さまであるから、十年や二十年過ぐるは遂ひ昨日の夢の如くであります。依つて、迅急に必要の道を求め、何つ無常の使が來るとも未練心無き樣安心治定して置くが、尤も肝要であります。

◎二月九日記載するもの左の如く

士農工商一切今日爲す處の業務は、之念佛の助業と心得て、專ら念佛を主として世業を第二と爲すべき事。既に元祖大師も『念佛申しながら勤めよ』とのたまふ。又云『たとひ餘事をいとなむとも、念佛を申しもうしこれをするおもひをなせ。餘事をしひ〳〵念佛すとは思ふべからず』とあり。

尤も此理にたがふ事なし。其譯如何といふに、念佛は卽ち之我等が本

性を念ずる事なり。シテ此身體の活動するは、之皆本性の作用なり。斯の如く本性あつての此肉體なれば、肉體の本は之本性なり。又此本性を心性とも佛性とも云。加之我本性は而も宇宙の大本にして、又萬像の本體なり。此萬象を我等が日夜衣食住に蒙りつゝ有る利益に對し念佛すれば、其萬象の御恩に報ゆる道理にも適ふなり。依つて念佛申す事は非常成る大功德なるが故に、念佛を唱へながら今日の勉めを爲すが無上の幸福であります。

◎二月十日

愚老は不斷念佛の利益を蒙りつゝ在りし故に、此永年間の今日迄、火難に逢ひし事もなければ水難にもあはず、又盜難にも出あはず、惡疫傳染病に罹りたる事もなく、或は衣食住に困難したる覺えもなく、所謂七難の憂へを遁れて、剩へ七福を授かるといふ事であります。七福とは無病、多衣、端正、肥體、饒(ゆたか)、淨人、身香、之を名付けて七難消滅七福卽生とは此ことにて、總て佛語に虛妄なしの確言は現に此利益を我身に受けつゝ居る事であるかと、今更の如く身に徹して有がたくそゞろに感涙を催したのであります。斯の如く愚老の身上にて相違の無き證據なるが故に、何方も不斷念佛をお稱へあらむ事を希望するのであります。

◎二月十一日

我等が拙愚の心を能々反省し見れば

智惠心なきが故に、　愚痴心あり。
悟道心なきが故に、　迷闇心あり。
忍耐心なきが故に、　瞋怒心あり。
靜定心なきが故に、　散亂心あり。
足納心なきが故に、　貪欲心あり。

慈悲心なきが故に、邪見心あり。
精進心なきが故に、懈怠心あり。
眞實心なきが故に、不實心あり。
平等心なきが故に、差別心あり。
記憶心なきが故に、妄失心あり。
布施心なきが故に、慳貪心あり。
正直心なきが故に、妄語心あり。
禮儀心なきが故に、不禮心あり。
慎守心なきが故に、邪婬心あり。
信誠心なきが故に、僞違心あり。
餘り多く成るが故に大略にして置きまする。なんと我らはかやうな賤劣心を持ちながら、今忽ち足下へ來る三塗の大苦患を、如何して防ぎ

如何して遁るゝものか。斯樣な惡邪見の心は之皆三塗の因であります。實に後生が怖ひではありませぬか。眞實後生が大事と氣が付くならば、先第一、過去及び今世に造り來りし罪惡心を深く懺悔すると共に、彌陀如來に無手と取り縋り、唯只管念佛して救助を願求すれば、如來は其精神をしろし召して其衆生を攝取し給ふ事更に疑ふべからざる次第でありますから、吾人は此他力念佛往生の外に後生の助かる道は二つも三つも有るべからざれば、唯此敎へを一向に信賴するが卽ち一大事であります。

◎二月十二日

我等外相に於ては、法律に犯則する程の罪惡は爲さゞれども、內心を申してみたならば、刑罰に懸かるやうな心が幾らもあれども、此心の罪惡は如何にせん法律を以て罰する事ができないのであります。されど

我等が心はソリヤ怖ひので、一念惡心を起せば親も殺せば主人も殺す夫も殺し、女房も殺し、兄弟も殺し、他人は勿論の事、又心に依りて人の物を盗み、或は密夫密婦もするのであります。斯樣申すれば餘り極端なやうなれど、實際之に相違ないのであります。其餘に怖ろしひ心も數多出るので、我身ながらもぞつとするのである。併しお互無事な時は左樣な怖ろしひ心はなけれども、一朝我心に逆らひ瞋恚の火の手が上りた時は、誰れ彼れの用捨なく死んで仕舞へといふやうな心が飛び出るのでありませう。なんと心は怖ろしひものではありませぬか。シテ其忿怒心が盛と成りて身體に顯れると、サアいよ〳〵主殺し親殺し夫殺し女房殺し及び他人を何人殺した抔と云ふやうな怖ろしひ振舞をするのですから、我等が心は別して惡の方には何處迄走るかもしれぬ。日々新聞紙上の通り、遺教經にも、心の畏るべきことは毒蛇惡獸怨敵盗賊大火のあれまはるよりも甚だしきなり、と。

斯の如く怖ろしひのであります。依つて私は毎度お勸め申す通り聞法して常に念佛を申してをれば自然と怖ろしき心も出ぬやうになります。よしや惡心が出たとて直ぐ懺悔し念佛すれば忽ち其惡心も消へ失せるのでありますから。どふか皆さんにも此功德の念佛をお唱へなさる事を希望致すのであります。

⊠二月十三、十四兩日して左の事を記書す

私は世人の臨終に就て、第一に病人の心得方、第二に看護人(家族の者)の病人へ對して言ふべき事、第三に親戚親友の人々臨終間近き病人を見舞ふて話す事、第四に醫師の思惑を改良したき事、此の四つの譯柄を申したいのであります。

第一に病人の心得方とは、總ての人大病に罹り臨終間近くなると雖も死の覺悟は更に無くして、只一日も早く全快する事のみを思ふ。之大成る誤りなり。人此世へ出生したる始めあれば、遲ひか早ひか必ず死する終りの有る事なれば、其邊を能く明め今我身に臨終の時期到來せりと思ひて觀念し覺悟して念佛すれば、自然と雜念を離るゝに至る。之病人第一の心得なり。

第二に、看護人の病人へ對して言ふべき事とは、看護の人、心中には此病人多日は持つまじと承知しながら、病人へ對しては全快もできるやうにいふ。之心口反對にして、親子兄弟夫婦等の誠は更になし、甚だ不親切と申さねばならぬ。假令死するをいふて病人力を落とすにせよ、病人の後生を助けたく思ふならば能く明めさせるの外なければ、會者定離無常迅速の道理を篤と申し聞け、病人看護皆共に心靜に念佛を稱へ

つゝ臨終させるが、之誠の親切にてあるなり。

第三に、親戚親友の人々臨終間近き病人を見舞ふて話す事とは、各病人の前では只氣休めに全快を早く祈るなどゝ、全快の事のみをいふて死の事は一言いふことなし。之又不親切の見舞ならずや。愈臨終に近き病人ならば他に言ふべき事なし。只死の覺悟をさせるが肝要なり。依つて何はともあれ、病人へ觀念を起させる話が卽ち親戚親友の誠とは申すなり。

第四に、醫師の思惑を改良したき事とは、醫師は病人の死日を凡そ何つ頃と他の者へ語るといへども、病人へ對しては體裁能く言ふて死の事は更にいはぬのである。之大に遺憾なり、病人へ覺悟させる事は他の者よりも醫師が有體を申し聞けたならば、病人は絕對絕命と觀念するに至る。ソコデ愈覺悟するなれば最早顚倒心もなくして、却て念佛

の心も起るなり。斯の如く病者へ覺悟させる事は、是非醫師より數日前に申し聞かせられたし。之醫師の功德にてあるなり。

總じて、病人へ死の事を聞かせぬといふは、元來病人に死の覺悟なきが故なり。抑、人として一生の大事は死の覺悟にあるといはねばならぬ。今臨終の場合に迫れば、如何に死を惜しむといへども生者必滅會者定離の習ひは、尊賤貧富老少の差別なくして死するは之當然の原則なり。此道理を辨へずして病人は只全快するのみを思ひ、他の者は全快の成るやうにいふは、さながら病人を欺くになる、之大なる殺生罪なり。依つて臨終最期の場合にゴロリ思惑が間違ひ、全快の積りが反對して死するのであるから、サア心が轉倒し煩悶して臨終の一念を誤るのであるなり。

此覺悟といふ事に就ては、平生臨終、臨終平生と申して、平生に能く覺悟して其行爲をせんければならぬ。然るに平生に死の覺悟するといふことは容易にあらざれども、平生に覺悟なくして臨終に至りて覺悟のできる筈はなし。平生覺悟ある人でさへも、イザ臨終と成りては大に思惑の變るのである。況して平生死を忘れたる不覺悟の人、臨終の場にいたれば果して轉倒狼狽して、又もや元の惡趣へ墮するなれば、何はさて置き、此覺悟といふ事を平素より充分致し置くが大事中の大事であります。シテ此覺悟を平生に爲すといふに就ては、自心の思慮を以ては及び難し。然れば何れの道何れの敎へに依るかといへば、之眞實佛敎の敎を受けて聞信する外に二つも三つもなし。故に死の大事は誰れ彼れの差別なければ、是非共眞實の佛敎へ便りて修行せられむ事を希望するのであります。

◎二月十五日

此頃當山の梅花が滿開になりました、何つもながら麗しき花の姿又芳しき香り、古今にかはらぬ無我のありさま、色卽是空、空卽是色と眞如の本體より假に色相と顯はれ、人に見せたきとも見られたきとも思はずして、おのづから生者必滅、無常迅速の理を敎示す。之彌陀今現在の說法にて、お互ひは其花を眺めていか成る感情を起さるゝか、之等を能思想せんければならむのであります。

◎同十六日

貴賤貧富に拘はらず、男女をいはず、逆緣に逢ひし時、困難の時、人に恥かしめられし時、情慾の起りし時、人より災難を懸けられし時、嫉妬心の起りし時、貪欲心の起りし時、瞋恚の起りし時、邪見心の起りし時、總て斯樣の心起りし時は如何なる爲業を以てか此意念を拂ひ此心を鎭めるものか、此時人より諭示を受け注告されても容易に其意念の治まるものに非ず、之單に手間隙入らず一向に念佛すれば、卽ち念佛の利益顯はれ斯苦念はむら雲の風に吹き晴らす如く散り失せるものなり。

◎同十七日

見てよからぬ物は見るまじ。見てはならぬ、見れば罪となると思ひながら其れを見た時如何せん。

聞きてよからぬ事は聞くまじ。聞きてはならぬ、聞けば罪となると思ひながら其れを聞く時如何せん。

言ふてよからぬ事は言ふまじ。言ふてはならぬ、言へば罪と成ると思ひながら其れを言ふたる時如何せん。

爲してよからぬ業を爲すまじ。爲してはならぬ、爲せば罪となると思ひながら其れを爲せし時如何せん。

思ふてよからぬ思ひは思ふまじ。思ふてはならぬ、思へば罪と成ると

思ひながら其れを思ひし時如何せん。

總て我等が六根のよからぬ行爲は、斯の如く見るまじ聞くまじ言ふまじ爲まじ思ふまじと心得ながら、其れを愼み難くして見る聞く言ふ爲す思ふ。此時如何して其罪を謝せんとするか、之を懺謝せずむば永劫の罪障と成る。此時座禪も及ぶまじ公案も益なし、自力思慮の計らふ處に非ず。唯單に彌陀にすがり隨犯隨懺して稱名念佛すれば、其惡念妄想は忽ち消滅して、見て見ん先の心となり、聞きて聞かぬ先き乃至思ふて思はぬ先の無念に立歸る事ができる。之を六根清淨といふ。依つて吾人は只此稱名念佛を行住座臥にするが、無上の功德にてあるなり。

◎東京に此法の開始せしより滿三十年に相當せしに就て、記念の爲同地に於て祝賀會を催さるゝ際

法の道ひらけて爰に三十年の、末榮えゆく東都會かな

三むかしに植し菩提の樹もさかへ、香りをしとふ法の友人

◎草菴に住し、水の不自由を思ひて斯く口ずさむ

しばしにもなくてかなはぬ火と水の、中にも水の功德尊し

爰に有がたき不思議の御利益を賜はりし事は、當迎山には出水の氣なく、古來より所々井を堀し事もあるやなれども、一滴も出水なし。又隣地に十五間の深井戸を堀たれども更に水出でず、故に迎山に井を堀るは無汰である、錢を入れるは駄目であると村中一般に申し居る由なれども、愚老にはさやうな噂は些とも存せず。兼て宮原翁より承はるには、當山の五町計西奥より一つの湧水ありて、其水が山のすそを流れ出る故に、夫れを引水すれば別段不自由はなしと聞きて、既に明治四十五年二月に草菴の建築も落成と承はりて京都より來庵し、暫時彼

引水の樣子を見るに、水源より三百五十間の長きを山のすそを彼方此方へと、うね〳〵廻りて出る途中には、塵埃にせき止められて水來らぬ事もあり、或は途中に穴がありてそこへ漏れて來らず、或は其流れを他より引く事もありて手元へ廻らずして困難する事もあり。シテ其僅の流水に蛙が幾疋もおれば餘の虫類も澤山おるといふ道中の間には、夫れは〳〵不潔極まりたる惡水と成が故に、飲料水は是非砂漉にして用ゆると雖も、其川筋の不淨を見れば中々氣持ち惡くて飲むには餘程辛棒せねばならず、夏向きになると其少水を田面へ落とすに、互に張番をして取合ふ爲に容易に當菴へ引水する事困難なり。風呂をする程の水は得られぬ故に、夏向きの行水は僅か釜で沸して汗を拭ふといふ。昨年の六月に井を五間まで堀たれども、其上は怖がりて堀れぬといふ。其れを強て堀らすには莫大の高價を申す爲め、一時中止したる後堀り手を得ず。斯る有樣ゆへ昨年來菴已來永の間朝夕佛前へ向ふ毎に井水を惠與し給はん事を念願し、よしや他所へ出向ふとも矢張り同樣に念願爲したるが、本年も追々暑さに向ふなれば、一日も速急に堀り井に取り掛り度思ひ宮原翁へ數回談事たる處、翁の紹介にて一人堀り手が でき、既に七月六日より着手に取かゝりしが、三日間にて都合七間迄堀り下りたれど未だ水氣見へず、堀り手もモウ此上は叶はぬと言ひ出したれど、段々前年來の事情を述べ、尙特別賃金を增し堀手も一人殖し明日最一日遣りて貰ひたし、夫とも出水なければ何とか相談致し度くと申して、翌日も遣りし處、午後五時頃に至りて出水の氣が見へかけたるが故夫れを樂みとして續いて翌日も堀りたる處愈出水となり、都合七日間にて八間半の下周圍より清美なる少しも癖のなき、殊に冷なる事氷の如くなる水湧出たるは、之單に如來より特別の御惠助を蒙りし

事なれば、佛恩の宏大成る且つ現世の利益の著しきを思ひ、將來永遠に水恩の有がたきを喜ばねばならず。然るに清水駒越の會員は勿論同村の人々斯程得難き水が澤山湧出ずるが爲め、皆々不思議〳〵と申して村人は愚老を神樣のよふなと申し、此井戸を見に參る者夥し。實に佛法力の不思議は人智想像の及ぶ所に非ず。

◎大正二年七月、水の功德に就て十首浮みて

水なくば米麥野菜いかゝせん、水の惠みの限りなければ
井戸に湧き池に溜りて世の人の、命を救ふ水なかりせば
雨となり雪や氷とあらはれて、有漏を惠みの利益尊し
世を救ふ水の功德のなりせば、金錢財寶何にかはせん
草木は其儘雨露の惠みなり、潤ひたるゝ水ぞ尊し
汗油不淨をぬぐふ水の恩、そまつにすれば身にぞ報ゆる

雨露の潤ひなくば草木の、元より育つためしなかりき
幾萬の船を浮かべる海川の、水の力ぞ限りしられず
汽車汽船數多器械の水となる、世界を助く水の大恩
大海に育つ無量の鱗の、命ち其まゝ水にぞありける

◎求法急務

急げ〳〵何はさて置き急ぐべき、求法の事は第一にして
萬をば捨ても求む法の道、一大事とは此事ぞかし
急ぐべき法の要務を怠りて、不急の事を共に爭ふ

◎報恩なき人へ對して

世の恩を忘れてさへもすまざるに、ましてや重き佛の大恩
宏大の恩を受けたる御佛の、恩を報せぬ人は畜生
恩を受け恩を忘るゝ人ならば、是ぞ人面獸心といふ

報恩の心なきゆへ懈怠する、恩を知らざる人ぞ恥かし
報恩の心さへありや往生す、御恩忘れば往生はせじ

◎ある時

誘導をするとさるゝの大違ひ、種は一つの佛子なれども
逢ひがたき法にあふても分らぬは、佛縁のなき印なりけり
怖ろしき外にはいがの針もてど、内には甘き栗の味はひ

◎大正三年一月、寅のとしにて

佛心をとら得たならばはなすまじ、命の限りどこのどこまで
佛心をしかととらまへざるゆゑに、とかく懈怠が習慣となる

◎機の深心

取りへこそ一つもあらで罪咎は、人に勝りて數多あるなり
身は賤し心つたなき身なれども、彌陀の誓を頼む身なれば

◎一向の歌

一向に南無阿彌陀佛を稱ふれば、佛も喜び助けます
餘念なく只一向に彌陀頼む、人を救ふが他力本願
一向に南無阿彌陀佛と唱ふれば、諸天善神晝夜守らん
一向に御名を稱ふる其心、取りも直さず彌陀のすがたぞ
一向に御名を稱ふる其聲は、我れには非で佛とやいわん
一向に南無阿彌陀佛を唱ふれば、寶池の蓮開きかほらん
一向に六字唱ふる其聲は、十方法界いたらぬはなし

◎諸佛護念

法の道唯一筋に喜ばゝ、諸佛は守る惡鬼怖るる
六方の諸佛に護念さるゝ身は、六字のみ名を念稱する人

◎諸意雜歌　二年三月より三年七月迄、五十九首

妄念を客人として念佛を、主とするが眞の行人
借りの世の命を賴む儚なさよ、無量壽佛と成りし身なるに
一念に救ひ給ひし往生の謂れを聞くが後の相續
上へもなき佛智の一念得る事は、無量劫にも稀の稀なり
極樂の遠き近きは心にて、迷悟二つのうへにこそあり
九年迄座禪するのは何ゆゑぞ、唯このぬしにあはん爲なり
一聲と聞けど容易にわかるまじ、唯一と筋に聞く外はなし
一聲に永き眠りも覺めたれど、聞法せねば其かひもなし
尊やな六字の御名の一聲は、三千世界へいたらぬはなし
妄念の病は常に起れども、六字の藥呑めば平治す
かゝる身を彌陀の大悲に救はれて、報土の往生するぞ嬉しき
念佛の數の多少によらざれど、數はおのづと出る信仰

妄念が起ればおこれ其儘に、唯唱ふべし彌陀の名號
有がたや六字の網に救はれて、外へは漏れぬ光明の內
夜る晝に八億四千の腹のごみ、六字の箒常にはなすな
後の世を大事と思ふ人なれば、此世の念も薄く成るべし
後の世を怖ろしと知る心なら、南無阿彌陀佛を常に忘れな
浪にもまる濱の眞砂の角なきを、人の心に寫てや見ん
念佛の妨げと成るものあらば、厭ひ捨てても南無阿彌陀佛
古へも今も變らぬ御佛の、御名唱へつゝ今日を送りて
名號を稱へながらに心をば、知らざる人は悲しかりけり
名號の心を知りて唱ふれば、佛意に叶ひ功德いやます
六か敷き法の修行は末法の、時機にもあらず修す人もなし
苦を拔きて樂を與へる彌陀釋迦の、法の敎へに逢ふぞ嬉しき

燒栗も再び芽出す例あれば、五逆の者も助かりぞする
降る雪は跡から消ゆるものなれど、我が惡業の罪は消へまじ
消へ難き我が罪業の消ゆるのは、彌陀の誓ひを賴む外なし
彌陀釋迦の敎へを聞きて信ずれば、必ず生る極樂の國
落る身をおとさじものと彌陀釋迦の、大悲の心限りしられず
露の身と口にはいへど心には、子孫の末を思ひわづらふ
きのふ見し人も今日なき世の無常、儚なき身とは思ひながらも
惜しみても返らぬものは命なれば、息の內にぞ信を取るべし
日々に活き說法は多けれど、餘所事にする人ぞ悲しき
徒にくらさじものと思へども、さて功もなき所作ぞ多かれ
光陰の過ぐる早さに驚けど、昨日もむなし今日もいたづら
人の身の儚なき事はいひながら、我が身の上はかへりみづ海

泡霜の消ゆるより猶ほ儚なきは、人の命のもろきにぞある
茲に消へかしこに浮ぶ水の泡、人の輪廻もかくやありなん
出る息入る息毎にへる命、何をたよりに末を待つらん
樂をして其樂すぐと苦となれば、苦のなき樂を願へ皆人
有るといひなしといへるも迷ひなり、有無を離れば眞なりけり
聞きし時さこそ道理と思へども、直ぐと失せけり元のくらやみ
耳馴れて只上聞きの信心は、一生慈悲のあぢは知らまじ
宿善の人ぞ少なしさりとては、いかに濁世と申しながらも
末法の五濁世界といへばとて、西へ行くべき人ぞ少き
雜談は互に耳を立てゝ聞く、眞の話しいへばいねむる
益ならぬ話は誰も聞たがる、益ある說は誰も好まず
有りがたや前世の種がはへ出て、又逢ひがたき法に逢ふかな

花も咲き紅葉も照りておのづから、眞の法を說くぞ尊し
老ぬれば先立つ人の多かりき、油斷はならぬ常に念佛
極樂へ參る此身と喜ばゝ、世のよしあしはとにもかくにも
彌陀佛の誓ひの網は廣けれど、我から漏るゝ人ぞ悲しき
鳥の聲松風浪の音迄も、おなじ御法と聞くぞ尊し
身を粉にし骨を碎きて報へとの、重き佛祖の御恩知るべし
何事も心一つの持ちやうで、樂とも苦とも迷ひさとりも
方圓に隨ふ水の如くにて、人も佛にまかせこそすれ
世の人はたとへ知らねど罪あらば、我と我が身を責むる惡業
心にて作る惡念妄念は、我が妻子にも語られもせず
形ちにはさのみ惡事はせざれども心に作る惡ぞ怖ろし

大正三年八月

平生に貯蓄たる金は身につかで、身に付物は惡業の罪
平生に造りし罪は消へもせで、まさかの時ぞ顯はれぞする
平生にほしや惜しやで暮しなば、地獄か餓鬼か畜生と成る
平生に南無阿彌陀佛で暮しなば、彌陀の淨土へ行く外はなし
平生に怠らざれば何事も、まさかの時は心易かれ
平生に忘れたき物貪慾と、瞋恚と愚痴の此意なり
口まねのみ法になれば益もなし、身に行ふて德を施す
悅びを口先き計りでする人は、所詮及ばぬ彌陀の淨土へ
途中にて懈怠を爲せば四修のうち、恭敬無間がかけるなりけり
此の法は一期の間續かねば、我往生の障りとはなる
余の事は皆忘れても南無阿彌陀佛の御名を常に忘れな
夢の世に借りの身を持ち限りなき、盡きぬ望みを願ふ儚なさ

借の身に假の業にぞ縛られて、眞の勤め忘れけるかな
五十年假の浮世に身をやつし、勤めにやならぬ道を忘るゝ

九月三日雜歌十七首

腕を切り法を求むる人もあるに、易行の法を聞かぬ悲しさ
南無阿彌陀唱ふる聲に導かれ、西へ進むの足の輕さよ
何事をいふても見ても思ふても、身の行ひにせずばかひなし
平生に思ふ心の念慮は、最期の時にあらはれぞする
欲望は命にかけて求むれど、心の法を望む人なし
世渡りを急ぎ〳〵て後の世の、大事を忘る人ぞ多かれ
道にいばらあれば憎みてよけれども、心のいばら憎む人なし
惡念の積る思ひが後の世の、苦患となるは恐ろしきかな
どこ迄も望みの絶へぬ人心、無常を餘所に見るぞかなしき

足る事を知りて浮世を渡る人、是ぞ誠の福者なりけり
誰も皆日々同じ事をして、退窟もせずあきる氣もなし
日々にかせぎて食ふて寢て起きて、其行先は何が目當てぞ
出る息入息またぬあはれ身を、持ちて子孫の末を煩ふ
何事も儘にならぬが世の習ひ、まゝになるのは彌陀の淨土ぞ
頭そり身には衣を染むれども、染むるにかたき我心かな
稀有の信得ても相續せぬ人は、又も地獄の釜こげとなる
息毎に消ゆる露命を持ちながら、後世を願はぬ人ぞ悲しき
我が心離れて外に道もなし、善惡邪正是ぞ道なり
聞き信じ稱へ行ずる人あらば、さぞや佛も嬉しかるらん
咲く花を見るにつけても尊とけれ、我れなき主の姿あらはる
おのづからすゝむ念佛も我ならず、彌陀の催す慈悲ぞ嬉しき

稱ふれば十萬億土も過ぎ去りて、極樂淨土は爰に顯はる
唯申せ罪はいか程深くとも、捨ぬ佛の誓ひ尊とし
一向に稱ふる念佛其儘に、彌陀の廻向と聞くぞ嬉しき
一向に稱ふる中に三心も、四修五念も功德籠れり
末なりの我等のやうなかぼちやでも、肥料一つで味は出るなり
世の中のよしあしも皆夢にして、望みを立てぬ心易けれ
古稀過ぎし齡なれどもさながらに、死ぬる心は急がざりけり
里に居て心を山に住みぬれば、憂喜苦樂は氣にも掛らず
深山をば厭世とのみいふぞかし、心を山に住せたきもの
此度は是非に生死を離れずば、最早遁るゝ折やなからん
苦を樂に爲して世渡る妙術は、六字の御名を唱ふ外なし
法鏡に照して見れば我れながら、取りる一つもなき身とぞ知る

よしあしにつけて喜ぶ法の身は、南無阿彌陀佛を常に離れず
極樂の花の臺に乘れる身は、南無阿彌陀佛が主と成りぬる
生き死にの苦患離れて極樂の國に住みける人ぞめでたし
八萬のみのりを說ける釋迦佛も、六字の姿知らせんがため
あながちに數の多少によらざれど、信には數がそふるなりけり
穢土に居て心淨土に住む人は、眞の法に叶ふ希有人
賴めよと敎へたまへる彌陀佛の、誓ひ賴まぬ人ぞ悲しき
捨た身も又取り戻す煩惱心、捨て切る事のできぬ凡心
信得ても聞かざる人ぞかなしけれ、他力を多く聞くに定まる
聞き稱へ信じ稱へる人ならば、爰に居ながら淨土極樂
寢て六字起きて六字は猶の事、常に六字と共に暮しつ
何事もあなた任せと思ひなば、よしあし共に心易けれ

法に逢ひ六字唱へぬ人ならば、逢ひてあはざる人にひとしき
行先を案ずる人は多けれど、後の世案ずる人ぞ少し
行先をとやせん角と思へども、死しての先は猶もくらやみ
信心を得ながら念佛せぬ人は、佛緣薄き人といふべし
信を得て常に念佛する人は、佛緣深き印なりけり
我れといふ心一つを捨て見りや、世界國土丸くおさまる
ありもせぬ我を立つる故世の中が、內外共に修羅道となる
形ちには罪も報ひもなけれども、心の惡が身をぞ苦しむ
我が惡は天知る地知る人も知る、第一己が心にて知る
極樂も地獄も己が心にて、善惡迷悟も心なりけり
悲慘なる事を見たとて聞いたとて、皆餘所事にするぞかなしき
寢て居ても怖き夢見る妄念は、地獄へ墮ちる因と知るべし

知らぬ間にたまる袂のほこり見て、心の塵の多きをぞ知る
十惡で隔つる故に極樂が、十萬億土遠くなりぬる
十惡をのけて見たれば極樂は、直ぐと我身に顯はれぞする
怖々し針は表へ顯はせど、心は甘き栗の味かな
佛法は餘所にはあらで我にあり、善惡苦樂是ぞ佛法
天地に滿る萬像其儘に、佛の姿と見るぞ尊し
我が心油斷のならぬ物なれば、南無阿彌陀佛を守護人にして
草木も我が本性の作用ぞと、悟る心は廣大なもの
廣大な心悟れば日月も、山海土も其中にあり
神儒佛敎への道はかはれども、眞一つはかわらざりけり
身の爲に心勞する事なかれ、心の爲に身をば盡して
世の人はたゞ身の爲に遣はれて、惜しき心を苦しめぞする

君は心身は僕なりと心得て、君に任せし僕は安樂
捨て行く此身の爲に苦しみて、後世まで罪を荷ひ行くなり
借りの身に深く執着するぞかし、別れる時はさぞや悲しき
我が身なら自由になるがなりはせじ、さすりや借り身と思ひしらねば
借身をば我身と思ふ横着心、老病死をば斷りて見よ
咲く花に始中終はあるなれば、我身に受けて感ずべき哉
四つの苦を花に顯す活法を、餘所に眺むる人ぞ悲しき
秋來れば數多の虫の鳴く聲を、聞くにつけても哀れなりけり
こその二字人につければ我れはなし、己れに付けば慢心となる
心をば寫す鏡は世に非ず、地獄にあるぞ怖ろしきかな
外富て心のうちの貧しきは、世に多くあり餓鬼道の因
貧しくも心の内の清ければ、佛はこれらを助けたまはん

世の人の心のさまを眺むれば、所詮浮めぬ元の惡趣に
三途より外に行くべき道もなし、心よりして招く罪咎
はる〳〵と此世へ何を目當にて、來りし譯を知る人ぞなき
老の身に賴みとすべきものあらじ、後世を願ふて念佛申せよ
長壽を人めでたしと祝へども、死ぬる近きはかなしからずや

◎今より六百四五十年昔、無住禪師の詠歌の中に、

座禪誦經學し書き讀む人ぞなき、飲食遊び色にのみとむ
座禪誦經談義の座には褻むれども、飲食ふ時は目を覺ますかな
食ひ物を座禪の床に置きたらば、公案よりも目は覺めぬべし

此三首拜見し、ましてや、今時は一層人機下根なれば、其意を以て左の
六首を詠ず
末法の今時の人に座禪とは、無理なお仕事魔道へ墮なよ

今時に座禪公案駄目な事、時機に合ねばやるかひもなし
末の世に座禪公案無理な事、達磨でさへも九年面壁
末法は自力の敎へ及ぶまじ、他力でさへも容易ならねば
座禪する千に一人は悟りても、九九の九まで慢を生ずる
佛法は時機相應といふぞかし、時機にあはざる法は益なし

本願の眞を知らぬ人は皆、いかで生死を離るべきかは
方圓の器に隨ふが水なれば、人も佛に任せこそすれ
生れなば必ず死する終りあり、生は死するの始めとぞ知れ
生ものは生を悅び死を嫌ふ、早く生死を離れたきもの
明かな一つの月は持ちながち、我が迷雲でおほひこそすれ
蓮花見るにつけても思ふかな、五濁に住みて心濁すな

我れが身を徒ものと知る事は、只本願の力なりけり
中々に我が身あしゝと思ふ機の、起るは彌陀の利益ならずや
拜む手も唱ふる口も念ずるも、六字の内に籠らぬはなし
此世にて導き受ぬ人は皆、あはれなるかな元のくら闇
あしければ人ぞと思ひよき事は、己れと思ふ我慢心かな
欲深き人ほど心穢けれ、是が鏡に寫るものなら
小欲の人の心はさも清き、足納すれば心易けれ
世の人は樂をしたがる心から、忍ては苦勞を求めこそすれ
世の樂は眞の樂でなきゆへに、樂が苦となる事ぞ多かれ
世の中の樂を樂ぞと思ひなば、やがて苦となる樂は苦の因
憂き事を見ても聞きても餘所にして、我身に受ぬ人ぞ悲しき
世の人の佛の道を聞かざるは、さても悲しや無宿善かな

法門の奥は〳〵と尋ぬれば、南無阿彌陀佛に勝る奥なし
八萬の法の要は南無阿彌陀佛のこゝろは此外になし
信を得ぬ先の心をいふならば、皆轉倒の迷ひなりけり
信を得て昔を思ひ見かへれば、只徒の事ぞ多かれ
爪の上の稀なる人の身を受けて、又徒に闇に入るかな
遁世のまことは心の内にあり、五欲離れば眞の遁世
遁世とは三毒などを離ること、形ちは山によし住ずとも
遁世の趣意を世の人知らぬ故、山居のみを遁世といふ
夜の夢に驚きはすれ永き夜の、夢を夢ぞと知る人ぞまれ
夜の夢も晝の思ひの餘りなり、念を重ねて惡趣にぞ入る
夢の内は罪を罪とも思はねど、夢さめぬれば罪ぞ怖ろし
吾が念が寫眞の如く寫るなら、妻子といへど見せられはせず

愛想もこそもつきたる我が念は、惡趣へ引くぞ罪の憎さよ
妄念の敵の心が起りなば、御名の利劍で直ぐに拂へよ
我身だに愛想の盡きし惡機なり、彌陀ならばこそ助けましまし
罪業の限りもしれぬ我等をば、見捨たまわぬ彌陀の慈悲心
幾度かあやうき心をとゞめけん、彌陀のなさけの限り知られず

◎所々にて口ずさみし雜歌

稻に實が入ればうつむく佛法は聞けば聞く程機がひくゝなる
稻に實が入る程さがる人は亦、財がます程機が高くなる
好く事が嫌ひになりて嫌ふ事、好きになりなば佛とぞなる
何事も皆徒になり果てぬ、誠一つはかはらざりけり
上もなきみのり信ずる人の身は、神佛常に護りたまはん
讃嘆は三十分に超過せず、心靜かに尊みてせよ

天地の開けぬ先に何がある、活空妙空是ぞ眞空
天地の開けぬ先の眞こそ、教の外の眞理なりけり
富士の雪見るにつけても餘所ならず、頭に積る老を忘れじ
ゆきゝしてかはらぬ富士は眺むれど、時々に變れる我身なりけり
筆取らず言葉なけれど法の道、梅桃櫻春はまされり
子を持ちて親の心の十分一、思ふ子なればまづよしとすれ
我が子をば持てども親の恩知らず、是ぞ人面獸心といふ
世事にのみ送る月日が多くして、御法を修する時ぞ少し
かねてより聞き傳へたる伊勢の神、本地をきけば阿彌陀佛なり
阿彌陀佛衆生を導き給ふとて、伊勢の神とぞ現はれにけり
肉身の主じを問へばいで入りの、息より外に活主はなし
此息に善惡苦樂迷悟なし、吉凶禍福生き死にもなし

我息に貧福高下もあらざれば、男女貴賤自他もへだてず
息主に色も形もなけれども、現に自在をなすぞ不可思議
六根を自由に爲せる主とへば、阿呼の息の仕業なりけり
我息も禽獸虫魚の息とても、差別はあらじ同じ一と息
我が息の廣大なるをもうすなら、三千世界に滿ちみつるなり
親に孝君に忠する善行も、元此息の作用なりけり
日月も草木國土海山も、我此息の惠み尊し
自力にて我が息主を了せんと、心苦すれどもとても及ばじ
座禪する其目的は何ゆゑぞ、我が息主を自覺せん爲
世に住みて心殘りのなきやうに、常に覺悟の用意をぞなせ
好まねど無常の使來たならば、未練の心なきやうにせよ
早くたゞ彌陀の誓を知らせんと、神も此土に現れにけり

神詣で世の願ひのみ言ふぞかし、神も心を痛ましむかな
後の世を神に詣でゝ祈りなば、さぞや嬉しく思召すらん
假宿に心を留めて本宅へ、歸るを忘る世の中の人
爰こそは假寢の旅の草枕、長き逗留はできぬなりけり
何一つ頼みにならぬ此世をば、頼みとするは迷ひなりけり
二つなきみのりに逢ひし人は皆、一期の報謝是非に勤めて
二つなき稀なる法に逢ふ事は、又二つなき仕合としれ
一向に南無阿彌陀佛を唱ふれば、淨土の蓮開き榮えん

◎惠觀、七十二歳を一期とする豫言のありしを思ひ出して

終に來たかねて覺悟の命終は、唯餘念なく南無阿彌陀佛
三十八年勤めも今は緣つきて、惜しき分れをつぐる同行

◎駒越に法緣始まりて日淺ければ

後に生れ獨り歩行の出來ぬ子は、親の乳房をしとひ離れな

◎大正四年卯年正月

寅は去り卯と生れて假の世を、あだにはならじ今に辰身を
卯は浪を走れど人は世の中の、波に溺れて浮む瀨もなし
波走る兎もあるに人は皆、浮世の波にたゞよひぞする

◎七十三歳の高齡を思ひて

七十三古稀も過ぎにし齡をば、彌陀に賜る身とはしられし

◎老衰の意を二首

いつの間にかゝる姿になりたると、我身ながらも驚きぞする
年寄りて姿を見れば我ながら、さても見にくゝ變りけるかな

◎一、自信敎人信は之念佛行者の常行なり。依つて此自信敎人信の行爲を簡短に申し述ぶれば、凡そ先輩の信者としては聞信を先とし專

ら念佛を相續し、常に有緣の人を心がけて勸誘し、又懈怠者に對して、其懈怠の罪過を說き諭して相續爲さしめるを要とす。此行爲を名づけて自信敎人信と申すのであります。御讃嘆を爲す人々は尙更自信敎人信の行爲が肝要であります。口に大悲を述べても身に其勸誘等の行爲がなければ、ソリヤ口丈の自身敎人信にして其人は未だ自信の信仰に至らざる人なれば、三業一致の自信敎人信とは申されず、之を喩て申してみれば、我が子兄弟が深き淵に沈まんとし或は井の中へ墮ちたる時、其親兄弟の心はどんなものでしやう。夫といふて直に駈つけ、身口意を揮ふて其急難を救助のであります。然るに其場へ駈つけても只口のみにて早く上れよ早く出よと叫ぶとも、決して助けらるゝものではありませぬ。一生懸命に三業一致の中にも取り分け身業の働きを以て引上げざれば、所詮救助ることのできない如く、今念佛の行者實

際自信敎人信の行爲とは、之に準へて承了し給ふべし。

日淺き信者は、御相續について第一辛抱が大事であります。最初のうちは佛語も聞き馴ざるゆゑに解らぬ事が多くあつて、つひそれから退屈の心が起りますれど、其處が辛抱所ですから、よく我慢して聽聞しまするとそれから逐々有がたく成るゆゑ、決して途中に退屈を起し懈怠してはなりませぬ。もし懈怠したならば、世俗にいふ百日の說法屁一つになつてしもう。それでは折角寶の山へ入り尊き寶を得ながら、又其寶を捨て元の惡趣へ歸るやうなものですから、よく辛抱して聽聞が大事であります。ソコデ聽聞が一年でき二年三年と續いて參ると、今まで大儀と思ふた出席が却て其席日を待つやうになりて來るのであります。そうなると、自分の相續に心配がなくなりたが、こんどは人の缺席するを惜く思ひ、又氣の毒な心が起りてソロ〳〵誘導に出るやうに

なります。實に有りがたいではありませぬか。佛さまの御慈悲といふものは、何處までも限りのないものであります。依つて辛抱が寶といふは此ことであります。無能上人の歌に、「始めには物憂かりしが今はまた、念佛せざれば淋しかりける」。こゝに成つてきまするから、如來の御慈悲が我が心中に輝きて下さるのでいよ〳〵とうとくなつて此マア有がたき御法を、已前は奥苦に思ひ出席するを大儀と存じたはさて〳〵勿體ない事でありたと氣がつき、懺悔心が起るゆゑ、漫に名號が稱へられて益〳〵信心が彌增し、何處までも相續せずにはをられぬとなりてくると共に、人の懈怠が氣になつて、勸誘に出掛け又新規の人をも誘導したく成るのであります。德本上人の歌に、「有がたや彌陀の誓ひは鬼までも、助けたまへる慈悲の深さよ」。之が卽ち自信敎人信にして、菩薩行と申すのであります。　大正四年一月

御法をばいたゞく人は多けれど、たべて味知る人ぞ少き
初めには物憂かりける念佛も、今はせざれば淋しかりける
初めには人前飾る念佛も、今は自分のものと成りける
一日に八億四千の罪咎も、形に出れば膽つぶすなり
光明は十方世界へ照せども、眺むる人の少かりけり
あざみ草針を表へあらはせど、人は心の內にもつなり

◎此三首は、咽喉を痛め音聲疲れの時に詠ず。

豫てより法の爲には身は盡す、心變らじ身おはるまで
武士は國君の爲身を捨つる、我はみのりの爲にすつなり
煩惱の爲に命を捨つる身が、今はみのりに捨つる嬉しさ
解らずに懈怠をするは是非もなし、知りて懈怠をするぞ悲しき

聞けば知る聞かねばしれぬ法の道、聞く身できかぬ人の愚かさ
聞く身にて聞かざる人の過ちは、再び元の悪道にいる
此法に逢ふていながら懈怠すりや、あはざる人が遙ましなり
何故にかくも得がたき身を受けし、此譯け知らぬ人ぞくら闇
上もなき法を求むる人の身は、過去世の因の現れにけり
此度は生死事大の勤めなり、進みて後世を願へ人々
年よれば心寂しく便りなく、信心一つを願ふ外なし
老の後信がなくてはかなふまじ、若き内より勵み喜べ
年よりて樂きものは信一つ、深く喜ぶ人ぞ安樂
草を取る度に思ふぞ我が胸の、妄念草のはへるはげしさ
法の道其ことはりを知る人も、行ひ難き法にぞありける
形ちこそ實には善者と見せけれど、心の惡はさてもみぐるし

草も木も山海土地も法の道、實にありがたき眞如實相
言葉なく草木花實の說法は、いかに尊し彌陀の直說
四季ともに法を說くなり草木の、生住易滅古今變らず
愚かなる心のうちを眺むれば、彌陀にすがるの外なかりけり
此身をば我がものなりと心へて、元の心を忘れけるかな
住み馴し假の宿りに心止め、歸るを忘る元の都に
へだてける心の雲にさへられて、眞如の月を見ざる悲しき
何事も己が心の外になし、迷悟苦樂も心にぞある
法界を己が心と悟りなば、十萬億も心内にあり

色欲の歌五首

世の人の輪廻に沈むもとは皆、欲と色との二つなりけり
色欲の二つの爲に苦しみて、長く生死の里を離れず

色欲の爲に命を捨る人、三途に返るしるしなりけり
色欲で捨る命は多けれど、みのりの爲に捨てる人なし
古はみのりの爲に身を捨る、今の捨つるは色欲のため

沈みなば二度と浮めぬ此身をば、効なく死する人ぞ悲しき
受難き人と生れて後の世を、願はで死する人の多けれ
人として欲はあれども強欲は、身を亡ぼすの基なりけり
限りなく貪欲心を起す人、餓鬼道へ墮つ驗なりけり
欲の皮引つぱり見れば限りなく、世界全國どこの何處まで
息毎に消ゆる命を持ちながら、行末長く思ふ儚なさ
露の身は一息毎に消へて行く、あはれ儚なき有爲の世の中
我が胸に作る罪咎怖ろ敷く、いつか報ひの來ると思へば

我が胸に起る惡念捨置かず、彌陀の利劍で直に拂へよ
上を見ず下見て世をば送りなば、望みは絶へて氣樂なりけり
足らずして足納をする心こそ、これぞ眞の福者とはいふ
何事も儘にならぬが浮世なり、佛任せにすれば安樂

◎七月二十四日、不可稱不可說の心

暑きとて口にはいへど釋迦彌陀の、慈悲のあつさはいふにいわれず

◎不可思議の心

暑き日を思ふにつけて彌陀釋迦の、慈悲のあつさは思ひしられず
暑き日に流るゝ汗と諸共に、南無阿彌陀佛を口に流して

◎紙屑籠の表に

紙くずをすけば白紙となりぬれど、人は死すれば何にゝ成るらん

◎賞與品の銀の急須に

法水で入れて呑んだる茶の味は、呑む度毎にうまみ出にけり

人死して亦人と成る心なら、人の行ひせずばなるまい
人として人の行ひする人は、必ず人と生れこそすれ
人として禽獸よりも劣るよな、所作をする人禽獸となる
姿こそいかに醜くあるとても、心の清き人ぞとうとし
よしあしの形によるな人は只、眞一つが寶なりけり
何もなき心の内に何もある、有無を離れた心佛心
有と無との中に一つの眞心は、教への外の心なりけり
世の中に珍寶とてもあるなれど、命に勝る寶とてなし
我をして草木も法を説くなれば、よく拜見しよくも感せよ
六根もなき草木も法説くに、心なくして見るぞ悲しき

天地の中に育つる草も木も、其まゝ佛の姿なりけり
あだに咲く花とて更になかりけり、人に知らせん法を説くなり
今時に座禪公案だめなこと、他力易行の教へあるのに
公案の極意は念佛するにあり、難行やめて念佛をせよ
世にこゆる誓ひの船のなかりせば、猶ほ此岸に迷ひはつべき
漏さじと彌陀の誓ひは深けれど、我れから漏るゝ人は是非なし
何事も皆我にありよそならず、善惡苦樂心からなす
金錢を無駄に遣ふも惜しけれど、喰はずにためる人ぞきのどく
極樂の議員となれる身をもつて、娑婆の議員を望むをかしさ
極樂の議員の資格を持ちながら、娑婆の議員は名利名聞
生き死にの命そのまゝ無量壽と、なせる佛の慈悲ぞ尊き
無量壽の命となりて生き死にの、人を助くる業ぞ佛心

◎憂世といふ意につきて六首

憂世とはうれへの世とは書くなれば、樂を求むる心轉倒

憂世とは憂きこと多き世とぞいふ、此譯知らぬ人ぞ猶うき

憂世とは文字の如くさとるべし、儘にならぬが憂世なりけり

人は皆憂世に深く迷ひ染み、安養世界をしらぬ悲しさ

心あらば憂世を假りの住居にて、淨土は本の住家なりけり

憂世にて後世の大事を勤むべし、もし勤めずば浮むせもなし

◎浮世の意について六首

浮世とは水に浮きたる泡にして、あるがあるやら無きが無きやら

浮世にて物を定める心こそ、皆間違ひのもとゝなりぬる

何事も當にならぬが浮世なり、當にするから皆苦しみとなる

浮世にて金も妻子も兄弟も、當になるもの一つもなきなり

何事も浮世の中は夢にして、思ふもいふも眞なければ

此世をば夢の浮世といふぞかし、親子兄弟夢の交り

◎神歌五首

神前で六字のみ名を唱ふれば、神も滿足なしたまふらん

神詣ふで後世を願へる人あらば、神は嬉しく思召すなり

現世をば祈れば神は嫌ふなり、後世を願へば神は喜ぶ

何故に神と現はれたもふぞと、其譯知れる人ぞ少き

萬神衆生を彌陀に結緣を、させんが爲に神と現はる

◎假りの世といふ

假りの世に深く心を止むれば、又も輪廻の因とこそなる

假りの世で眞の道を求むるは、彌陀本願の外はなきなり

◎雜歌　十九首

安養の彌陀の淨土へ行きたくば、寢ても覺めても御名を忘れな
死を恐れ生をむさぼる人は皆、無量壽國を願ふ外なし
一心に南無阿彌陀佛を稱ふれば、寶池の華は開け榮へん
世の夢を見ながらに行く法の船、彌陀に任する身こそ安けれ
一聲に彌陀の淨土へ生るゝは、不思議の中のふしぎなりけり
此度はどふでもこふでも浮まずば、又も炎の下に住むなり
へだゝりし十萬億土の極樂も、南無を賴めば一聲に行く
世の中の役をすまして今はは、極樂參りの身とぞ成りぬる
宇宙をば法のみくらと思ふべし、一切萬像これ、よりぞうむ
法門の奥は〳〵と尋ぬれば、六字の御名に勝る奥なし
六の字を開きて見れば八萬の、釋迦のみのりも此内にあり
信得ても後のつゞかぬ人ならば、彌陀は悲しくおぼし召すらん

信えてもあとを聞かざる人は皆、又も生死の淵に沈まん
常によく覺悟さへすりや臨終に、未練な心起らざりけり
いさぎよく返らぬ旅をする人は、常に覺悟の色ぞ現はる
日々にたまる袂の埃り見て、我心中の埃り拂へよ
苦と樂は己が心の内にあり、迷へば地獄さとりや極樂
曇りなき心の月は照せども、へだつる雲の出るぞ悲しき
日々に憂喜苦樂と變りけり、賴まれがたき我心かな

因果を撥無する邪見の句、五首

因果をばおそれぬ人ぞ邪見なり、無間地獄の釜こげとなる
人死なば煙とゝもに消ゆるぞと、思ふ人には惡を恐れず
人死なば又人なりと思ふ人、因果をつぶす大邪見なり
因果をば撥無する氣ぞ怖ろしき、阿鼻地獄より向ひにぞくる

霊魂は形とともに消ゆるぞと、思ふ邪見の人ぞ怖ろし

後の世を助け給はる御恩には、南無阿彌陀佛は御禮報謝ぞ

恐ろしき後世を助かる身となれば、六字のみ名は寢ても覺めても

⊠大正五年一月

卯か〳〵と今年も遂に立ちにけり、行く先き近き老の暮れかな

卯か〳〵と今に辰巳をもちながら、行く末ながく思ふはかなさ

卯か〳〵と今に辰巳の時ぞ來る、いよ〳〵申せ彌陀の名號

うか〳〵と世の忙しきに取まぎれ、後世の勤めを忘れけるかな

元日に舍利頭をもちあるく、是をさとれば眞のめでたし

うか〳〵と月日の辰と老の身は、急がぬたびの先きの近さよ

⊠辭世

今更に殘す言の葉なかりけり、かねて傳ふる道の草々

大正六年十月十日印刷
大正六年十月廿日發行　（非賣品）

編輯兼發行人　信行社

右代表者　宮川長治郎

京都市五條通高倉東入

印刷人　澤田友五郎

325
246